

# 北宋における李成の評価とその文人画家像形成について

—子孫・鑑賞者・李郭系画家との関わりから—

竹浪 遠

## はじめに

五代、北宋初期の華北山水画の大家・李成（九一九～六七）は、当時高度に発展を遂げつつあった水墨技法を用いて、自らの育った山東地方の風土に根ざした平遠山水を創り上げた。彼の画風は、北宋の多くの画家に学ばれ、後期の郭熙とともに李郭系山水画の始祖となり、また文人画家であるとの見方が定着して、北宋末には最大の山水画家と評価されるに至る。筆者は先に、伝称作品である「喬松平遠図」（澄懷堂美術館、1 図1）を唐代樹石画との影響関係から考察し、彼が伝統を受け継いだ上で、五代の時代性、山東の地理性を反映し、水墨技法の高度な光や空間の再現性を導入することにより、来るべき北宋士大夫のための樹石平遠山水画風を生み出したことを指摘した。1

ただ、当の李成本人は、北宋のごく初期に亡くなっている。絵画史における李成の突出した評価は、彼以後の人々によってなされたものである。彼の生涯およびその子孫については、先学の研究があり、李郭系画家に関してはさらに多くの蓄積がある。2 けれども、李成の子孫、彼の画を愛好した鑑賞者たち、そして後継の画家たちが、どのような活動のみ

せ、彼の評価や文人画家像の形成に関わったのかについては、北宋山水画史の中心を貫く課題として、なお考察すべき余地があると考え、本稿を草することとした。



図1 (伝) 李成「喬松平遠図」  
(澄懷堂美術館)

## 一 李成の生きた時代

考察の冒頭に、李成の生涯について概観しておきたい。李成は、字を咸熙(4)といい、五代(九〇七〜六〇)最初の王朝である後梁(九〇七〜二五五)の貞明五年(九一五)に生まれ、北宋(九六〇〜一一二七)の乾徳五年(九六七)に四九歳で没したことが墓誌銘(5)に基づく資料から分かる。王朝の交代で言うと、生まれたのは唐が滅んで一二年後、亡くなったのは宋が興ってわずかに七年後である。後世では北宋の画家として扱われることが多いけれども、実際の活躍期が五代の約半世紀とほぼ重なっている点は、彼の画風形成や歴史的な位置を考える上で重要である。

彼自身は正史に立伝されていないが、息子の李覚(九四八〜九三)と孫の李宥(九八八〜一〇四九)は、科挙に合格した文人官僚で、それぞれ『宋史』に伝があり、李成を含む祖先についても記述される(6)。また、李宥には北宋中後期の政治家・張方平(一〇〇七〜九一)が撰した「李公墓誌」(7)が残されており、これにも祖先についてほぼ同内容が記されている。

それらによると、その血筋は唐宗室の末裔とされ、原籍は長安(陝西省西安)だが、祖父・鼎の代に呉(江蘇省蘇州)から、さらに青州益都(山東省)へ移住したという。後世、彼のことを李營丘と称するのは、青州の汎称が營丘であったことよっている(8)。家は代々儒者で、祖父・鼎は唐の国子祭酒、蘇州刺史を務め、父の瑜も青州の推官になったという。ただ、現在それらを裏付ける資料は残っていない。一般に歴代の王朝では、史書編纂の上からも、ある程度の官位に至ったものは、出自を明らかにする必要があり、そのため、先祖にもそれに見合った経歴が加えられることも有り得たため、唐の末裔や鼎が国子祭酒、蘇州刺史であ

ったというのもどこまで真を伝えているか分からない。しかし、李覚と李宥が科挙に合格し、文人官僚となったことは事実で、そのためには経済力や血縁、地縁による援助基盤が無かったとは考えにくいことから、少なくとも五代の青州における有力層の出身であったのだろう。

李成の壮年期までの経歴については、詳しいことは分かっていない。「乱世に仕えず。懐いを詩酒に放ち、逸民とともに遊ぶ」と「李公墓誌」はいう。李成の墓誌銘に基づく南宋・王明清『揮麈前録』巻三も「性盃酒を嗜み、琴奕を善くし、山水を画くに妙たり。好んで歌詩を為す」とする。この時期の彼についてこれ以上の記録は伝わっていないが、次に述べる彼の育った頃の青州の状況は、彼の処世態度や作画を理解する上で重要である。

青州は山東省の中央やや北に位置し、益都(現青州市)はその州城が置かれた県である。唐代に平盧軍節度使が置かれ、五代へと受け継がれた(9)。しかし、任命された節度使とその配下の者たちには、朝廷に反抗的な態度をとるものがしばしば現れた。例えば、後唐(九二五〜三六)・天成元年(九二六)、李成八歳のときには、節度使の符習が遠征から帰還しようとした際、指揮使として青州を守っていた王公儼が反抗的な態度をとったため戻ることができず、朝廷が霍彦威に命じて派兵し、屈服させるといふ事件が起こっている(10)。

また、後晋(九三六〜四六)の天福八年(九四三)、二五歳の時には、節度使・楊光遠が契丹(遼、九一六〜一二五)を後ろ盾に反旗を翻した。青州は李守貞率いる官軍に包囲されて一年間の籠城戦となった。結局、この反乱は、契丹軍も朝廷に撃退された結果、翌年一二月に降伏した際には、「城中食尽き、餓死する者大半」という有様であった(11)。楊光遠は殺され、青州藩鎮は一時廃止となった。この折の李成の動向は不明

ながら、故郷が戦乱に巻き込まれたことは、青年期の彼に大きな衝撃を与えたであろう。しかも、騒乱はそれだけでは収まらなかった。二年後の開運三年（九四六）には、遼の太宗率いる大軍の侵攻を受けて後晋は滅亡し、華北は一時、遼軍の占領を受けた。翌年正月には楊光遠の息子の楊承信が、遼の後押しで青州節度使に任じられたが、遼軍は民衆の根強い抵抗にあつて華北経営を三カ月で断念し、北帰した。代わつて山西の軍閥・劉知遠が開封に進出して後漢（九四七～五〇）が成立し、青州節度使には、有力武将の劉錡が新たに任命された。けれども、その統治は「貪虐恣横」で朝廷に反抗的な態度をとり、三年後の乾祐三年（九五〇）、近隣の州から兵が出されるに及んでようやく入朝した。ところが、今度は後漢自体が武将たちの反乱によつて、わずか四年という歴代王朝最短の期間で滅亡してしまつた。李成三二歳のことである。

このように、李成の三〇代はじめまでの青州をめぐる政情は、節度使自体の反抗、遼の侵攻、王朝のめまぐるしい交代などに翻弄され、極めて不安定であつた。この頃の彼が、詩画や酒にうさを晴らしていた背景には、乱世の厳しい現実があつたのである。前稿において「喬松平遠図」にみられる、松葉の放射状に広がる描法や、梢のわだかまつた形状は、唐代の繁茂した笠形の葉叢の松に代わつて、五代の時代状況により相應しい蕭条とした趣を追求した結果との見解を述べたが、その表現も、恵まれぬ時代状況の下で醸成されたのである。

李成に仕官のチャンスが訪れたのは、五代最後の王朝・後周（九五～六〇）になつてからであつた。同じ山東地方の東平出身で、後周の枢密使となつていた王朴（九〇六～五九）の招きにより、顯徳三～五年（九五六～五八）頃に、都・開封（河南省）へ上つたのである。彼は、五代第一の名君と讃えられる世宗（在位九五四～五九）に仕えた文臣で、顯

徳二年（九五五）には、後周の基本戦略となる先南後北策（北方攻略をあとにして、江南・蜀の平定を優先させる方針）を上奏し、左諫議大夫、開封府の知事に抜擢された。その後も、世宗の信任を受け、枢密使にまで出世した。しかし、顯徳六年（九五九）三月に王朴は急逝し、李成の仕官の望みも潰えた。同じ年の六月には、世宗も遼への遠征途中の病がもとで崩御し、その翌年には、後周の禁軍総司令官の地位にあつた趙匡胤（太祖）が、諸將に擁立されて宋王朝を建てる。

この変動の時期、李成は開封において貴顕と交わつたとも伝えられるが、もはや仕官はかなわず、乾徳二～五年（九六四～六七）頃、陳州（河南省淮陽）の知事であつた司農卿・衛融（九〇五～七三）に招かれて同地に移つた。衛融も、山東省の青州博興の出身で、北漢（九五～七九）に仕えて宰相となり、宋との抗争の際、捕らえられ死罪になるところを、主君への忠誠の堅いことに感した太祖に許されて官を得たという経歴の持ち主だつた。ここでも、李成には山東出身者との結びつきがあつたことが注目される。しかし、その後も李成は鬱々として樂しまず、詩酒に日々を送り、乾徳五年（九六七）、四九歳で客舎に没した。

彼の一生は、北宋の全国統一（九七九年）も、皇帝を頂点に科挙官僚が政治を担当する文治主義の確立も見ることなく終わった、不遇な在野の士にすぎないように見える。しかし、その評価は時間とともに高まり、多くの画家たちに学ばれるとともに、彼自身は文人画家として扱われることが多くなつていく。次章からは、その過程を李成の子孫や鑑賞者、李成系画家の活動を通して考察する。

## 二 北宋前期の絵画状況と李覚

北宋前期は、太祖（在位九六〇～七六六）、太宗（在位九七六～九七七）のもとで、文治主義体制の基盤が築かれた時期である。建隆元年（九六〇）、後周から帝位を引き継いだ太祖は、荆南（九六三年）、楚（九六三年）、後蜀（九六五年）、南漢（九七一年）、南唐（九七五年）の諸国を次々に平定するとともに、節度使の権限を回収させ集権化を進めた。しかし、開宝九年（九七六）に急逝し、弟の太宗が後を継いだ。兄のもとで建国の片腕となってきた彼は、帝位に就くと、呉越（九七八年）、北漢（九七九年）を服属させ天下統一を達成するとともに、中央・地方行政や財政などの諸制度を整備していった。科挙では、皇帝自身が最終試験官となる殿試が定着し、皇帝との密接な結びつきのもとで科挙官僚が政治を担う体制が築かれていく。

この時期、既に李成の画名は、ある程度高まっていたと思われる。北宋中期の劉道醇『聖朝名画評』巻二、李成条には、太祖の開宝年間（九六八～七六六）に都の富豪・孫四皓（孫守彬）が李成を自邸に招こうとした著名な逸話を載せている。誘いに対して李成は、「吾は儒者」であり「性、山水を愛し、筆を弄して自適するのみ。豈に能く豪士の門に奔走し、工技と処を同じうせんや」と応じなかった。そこで、孫氏は管丘へ使いを出して彼の画を購入させ、李成が進士科受験のために上京した際、再び辞を低くして招待し、その画を見せて憤慨させたという。実際には、開宝改元の前年に李成は没しており、科挙を受験したことも伝聞の域を出ないが、ここでは、一世紀弱を経た北宋中期において、李成の画が北宋前期の開封で評判となっていたと考えられた点に注目しておきたい。

当時の彼の評判を伝えるこれ以上の資料は知られないが、李成が五代から北宋初期に好評を得た背景は、当時の開封の絵画状況からも窺うことができる。郭若虚『図画見聞誌』巻二では、徳符という松柏を善くした五代の画僧が、開封の相国寺の灌頂院に一松一柏を描いて評判となり、士大夫たちがこぞって題詠し百余篇に及んだという<sup>22</sup>。その画風については不明であるが、同書、巻四では、彼を師とした劉永について、その後諸家の山水を学んだ末、李成より先行する華北山水画の大家・関全の画風を専門にしたという<sup>23</sup>。従って、徳符の画風は関全よりも前の晩唐の樹石画風をとどめるものであったかと推察される。その松柏図に士大夫たちが題詠したのも、唐代松石図の鑑賞伝統に連なるものである<sup>24</sup>。そのような、樹石画の制作と鑑賞が、李成の上京した頃の開封で行われていたことは、彼が唐代樹石画を踏まえつつ生み出した樹石平遠山水を歓迎する基盤ともなったであろう。

しかし、開封の絵画事情は、北宋になると大きく変化していった。乾徳三年（九六五）に後蜀が滅ぶと、道釈人物画家の高文進、趙元長、花鳥画家の黄筌、黄居采、夏侯延祐らが開封に集められ、画院に召抱えられた。開宝八年（九七五）には南唐が降伏し、後主・李煜に従い龍水画家の董羽、人物画家の厲昭慶、画船を善くした蔡潤らが都に至り、画院に加わった。画僧の巨然もその一行にあった。王朝が目まぐるしく交代した五代の華北地方では宮廷文化が根付かず、むしろ文化的に栄えていたのは比較的政治の安定していた蜀と南唐であった。華北からも道釈人物画家の王翬、高益、花鳥画家の陶裔などが画院に入り、これら三地域の画風が並存・影響し合う状況が生まれていく。ただ、この時期の宮廷画家は、概ね道釈人物画家と花鳥画家であった。開封第一の寺院である相国寺の重修など、新都の造営事業により大量の障壁画需要が生じてい

たのである。一方、山水画に関しては、詔勅の起草を担当し、皇帝の秘書官の役割を果たす翰林学士の集う翰林学士院玉堂の壁画において董羽が龍水を、巨然が山水を担当したのが注目されるが、両者とも旧南唐の画家である。また、太宗の時に画技を見出され、むしろ次の真宗の画院で活躍する燕文貴も、江南の呉興（浙江省湖州）の出身である。

画家登用の一方で、書籍・書画の収集も、既に太祖の頃より平定した国々からの接収が行われていたが、太宗になると繰り返し詔が出され、全国規模で実施された。絵画については、蜀出身の待詔・高文進・黄居采の二人がその任に当てられている。<sup>27</sup> 端拱元年（九八八）、太宗は宮中の崇文院に秘閣を新造し、それまでに収集した多数の書籍や墨蹟、古画を保管させた。記録によれば、絵画は、東晋の顧愷之の維摩詰像、唐の韓幹の馬、薛稷の鶴、戴嵩の牛といった古画に加え、契丹の皇族・李贊華（耶律倍）の千角鹿、黄筌の白兔など一四〇軸があったという。<sup>28</sup> その記述ぶりから当時重視されていたのは、晋・唐の古書画であり、近い時代で挙げられたのは、契丹出身の李贊華と蜀の黄筌であった。

このような状況を踏まえれば、太祖の時に世を去ったばかりの李成が、これらの古画や新来の蜀・江南の画家たち以上に注目されたとは考えがたい。唐の余風を留め宮廷文化の栄えた後蜀や南唐出身の画家に対し、五代・宋初の華北山水画の大家は、李成のみならず荆浩・関仝・范寛も皆在野で活動しており、新皇帝たちにとって彼らの水墨山水は、たとえ宮中の所蔵の一端に加わったとしても、優先して注目すべきものではなかったようにみえる。北宋前期の文人士大夫の文集は、現存する数自体が少ないが、それらを通覧しても、その時期の華北山水画家に関する記述は僅か<sup>29</sup>で、新興官僚層の関心も、皇帝と共通の方向であったと考えるべきであろう。当時、李成の山水画は、北宋後半のような圧倒的名

声を得る状況にはまだなかったのである。

けれども、一方でこの時期は、李成の画家像を形成する上で、非常に重要であった。子の李覚（九四八〜九三）が科挙に合格し、父には叶わなかった出仕を果たしたのである。<sup>30</sup> 李覚は、字は仲明。父が亡くなったときには二〇歳であった。太平興国五年（九八〇）三三歳で九経に及第した。九経は、經典の全てに通じている必要があるため、進士の次に高く評価された科である。将作監丞の寄禄官から官途に入り、通判建州、左贊善大夫・知泗州を経て、秘書丞に位階を上げ、その後、国子監の『礼記』担当の博士となり、さらに位階は国子博士となった。端拱元年（九八八）、太宗が国子監に行幸した際に、運命的な出来事が起こった。臨幸した太宗の前で『易』の泰卦の意義を説いて好評を得たのである。<sup>31</sup> 太宗に知られた彼は、同年から翌年にかけて養馬、漕運などに関する政策を上書して嘉賞され、直史館の館職を加えられた。国史の編纂に携わる名譽あるポストで、若手官僚の出世コースでもある。しかも、それは明経科出身者としては異例の抜擢であったため、進士出身者からは反対意見も出されている。当時、右正言で直史館に就いていた王禹偁（九五四〜一〇〇一）は、時の宰相である呂蒙正（九四六〜一〇一一）に「上史館呂相公書」<sup>32</sup>を呈して、この特例人事が不適當だと進言した。

「前略」相公、史氏廢墜し、人を編修に闕くに及ぶに因て、且つ曰く、国子博士李覚、屢しば修撰を以て時の政事に干せんと。「中略」李覚、位は国庠に列し、当に胄子を教うるに詩書礼楽を以てし、講誦誨誘すべきのみ。又安ぞ之に史筆を授くるを得んや。今館中の士、先進の者、金部員外郎安德裕、左司諫兼直秘閣宋泌の若き有り。皆名節を砥礪し、文学に老ゆ。之をして修撰せしめば、輿論帰せん。

「中略」相公豈に館閣諸生の才学識見を以て、皆覺に及ばざらんとするや。「中略」徧く直館を覺とともに召し、聚して庭試し以て之を考うるに若くは莫し「後略」。

九経出身の李覺には、文学の素養があるか疑問だというのがその理由であり、進士出身者の自負と抵抗感が如実に表れている。けれども、結果的に李覺は、唐の韓愈が筆の歴史を擬人化して綴った「毛穎伝」〔昌黎先生文集〕卷三六に倣った文章「竹穎伝」を献上して文学の素養を示し、この人事は認められた。文章は現存しないが竹穎とは矢のことで、それを紀伝風に記したものが分かる。

太宗に認められ、国子博士、直史館となったことにより、李覺は、仕官のかなわなかった父への贈官を請求した。その結果、李成には光禄寺丞が贈官され、開封西北の浚儀県魏陵郷に改葬された。この墓誌の文章は、完全な形では伝わらないが、北宋後期の『図画見聞誌』、『灑水燕談録』および南宋中期の『揮塵前録』に節録され、李成の文人画家像形成に重要な影響を及ぼした。『灑水燕談録』の著者・王闢之は、青州臨淄の出身で、本書には青州に関する記事が散見されるが、李成の伝記に関しては墓誌以上の情報は含まれておらず、もし、李覺の出世がなければ、李成の伝記がこれほど残ることはなかったと考えられる。墓誌を撰したのは翰林学士の宋白（九三六―一〇二二）、書は御書院に直した王著（？―九九〇）、篆書は南唐出身の碩学で『説文解字』の研究で知られる徐鉉（九一七―九二二）で、いずれもその分野における当時の第一人者であった。人選の点からも、李覺の孝養が窺える。

李覺は、その後、『春秋正義』などの校訂に加わり、淳化二年（九九一）には水部員外郎・判国子監（国立大学の総長）に改められ、四年（九九

九三）には、司門員外郎にまで位階は上ったが、病によって退官し、ほどなく四六歳で没した。経書に通じた学官として太宗に認められ、国子監の要職にまで昇進していた中での早世であった。

### 三 北宋中期の李成画流行と李有

李覺の没した四年後、太宗は崩御し、時代は真宗（在位九九七―一〇二二）の治世へと移る。景德元年（一〇〇四）、五代以来争いの続いていた北方の遼との間に和約「澶淵の盟」が結ばれると、前朝までに国庫に集められた富を背景に、天書降臨の慶事が企画される。大中祥符元年（一〇〇八）、泰山で天を祭る封禪が行われ、天書を奉安する玉清昭応宮や宋の天子と后妃の像を祀る景靈宮などの造営が華やかに行われる。この真宗から仁宗におよぶ北宋中期は、李成の評価が次第に高まってくる時期である。『聖朝名画評』は、李成条において「草聖「真宗」、成の筆を見る毎に、必ず之を嗟賞す。故に声価益ます甚し」とし、真宗が彼の画を好んだことを述べている。画院の状況にも変化が現れる。既に太宗の時から活動を始めていた燕文貴は、玉清昭応宮建設の折に描いた山水が認められて図画院祇候に補されたという。また華北出身の高克明も、大中祥符年間に画院に入った。両者はともに細密な山水画風を得意とし、宮廷内でも山水画がより評価されてきたことが分かる。

『聖朝名画評』では、真宗の李成画愛好に触れた後に、建国の功臣で真宗初期に枢密使を務めた曹彬（九三一―九九）の邸宅に、六幅からなる山水図があり、直史館であった劉鼈が、これを詩に詠み評判になったことを言う。

直史館劉鼇なる者、時に精鑑を推さる。曹武惠王の第に於いて成の山水図を見、之を愛して已まず。詩有りて云う。六幅の氷絹は翠庭に挂かる、危峰疊嶂は崢嶸を鬪う、却て一夜芭蕉の雨に因れば、疑らくは是れ巖前瀑布の声かと。識者以て実録と為す。

六幅の絹本による大画面であり、「危峰疊嶂は崢嶸を鬪う」という高遠風の山岳主体のものであった。そのため、李成本来の様式を伝える作品であったかは疑問が残るが、権臣の邸宅に李成筆とされる画蹟が蔵され、士大夫の愛玩を受けていたことは注目される。劉鼇の伝記については詳しいことは分ならず、詩が作られたのが太宗朝であった可能性もあるが、『聖朝名画評』の記述の順序からすれば、曹彬晩年、真宗初期のこととみられる。

太宗・真宗交代期の李成評価に関する資料としては、他に蘇耆（九八七―一〇三五）『次統翰林志』がある。太宗後期の翰林学士であった父・蘇易簡（九五八―九六六）からの伝聞に基づいて、大中祥符七年（一〇一四）に記されたもので、翰林学士院玉堂の後方にあった東西二書閣に描かれていた巨然の「煙嵐曉景」壁画を、李成に效つたと指摘している<sup>49</sup>。画題が示すように明け方の光や大気を水墨技法によって描いていたと考えられ、同じく淡墨による大気表現を得意とした李成からの影響を見出したのである<sup>50</sup>。それを記述すること自体、李成画への注目を示している。李成の画蹟は、太宗の時代には、まず彼ら新興の科挙官僚層である士大夫や孫四皓のような財産家たちの収集するところとなり、現存する文献には目立たないものの徐々にその評価を高めていた。それがおぼろげながらも資料として表れてくるのが真宗の時期であり、士大夫の李成画風への注目が、真宗自身にも影響を及ぼしていったのではないかと推

察される。

李覚の子・李宥（九八八―一〇四九）が、科挙に合格し官僚となったのも真宗の時である。彼の伝記については、張方平（一〇〇七―九二）撰述の「李公墓誌」<sup>51</sup>が伝わっている。張方平は、北宋中―後期の政治家で神宗の初期には一時副宰相ともなった人物だが、李宥と同僚であった時期もあり、それだけに記述は具体的な情報に富む。李宥、字は仲巖。父が亡くなった時、まだ六歳の幼少であった。大中祥符五年（一〇一二）、進士に及第し、火山軍判官に任じられた。真宗が宮中の書籍の校勘に人材を求めた試験で、百人の中から合格者三名に選ばれて館閣校勘となり、真宗の御集編纂や雅楽の制定に当たった。

乾興元年（一〇二二）、以前より病気がちであった真宗が崩御すると、仁宗（在位一〇二二―一〇六三）が一三歳の若さで跡を継いだ。范仲淹、韓琦、歐陽脩らの士大夫による理想の政治が実践されたとされる「慶曆の治」で名高い四十一年におよぶ治政の始まりである。ただ、一方では国初以来の制度の矛盾が表面化し、西北辺境に興った西夏（一〇三八―一二二七）との戦いによる軍事費の増大も問題となっていく時期でもあった。即位当初は、まだ若い皇帝に代わって章献皇太后が摂政となり、人事の刷新が行われた。その中で財務派の宰相として前朝で権勢を振るつた丁謂（九六六―一〇三七）は、専横振りが非難され、家財取り上げの上、崖州（広東省）に貶せられた。『図画見聞誌』巻六には、その際、没収された家蔵の書画のなかに李成の「山水寒林」九十余軸があり、悉く内府に分納されたと伝える<sup>52</sup>。その数は、後の『宣和画譜』収載の徽宗内府の李成画でさえ一五九点であることから異常な多さであり、真筆がどの程度含まれていたのかは疑わしいが、真宗朝の士大夫たちの李成画収集熱を示す一例である。

この話の起きた仁宗初年には、李宥は引き続き館職にあり、二年後の天聖二年（一〇二四）の正月には校勘から集賢校理に昇進して、科挙の答案の点検官を務めている<sup>(56)</sup>。彼は祖父の画が、周囲の人々に愛好され収集されるのを、肌で感じていたであろう。次にあげる燕肅、許道寧、翟院深ら、李成の画風を受け継ぐ画家たちの活動が、はっきりと見え始めるのも、仁宗になってからである。

燕肅（九六一―一〇四〇）は、本貫は李成と同じ青州益都だが、父の代に曹州（山東省曹県）に移ったため、同地で生まれた<sup>(57)</sup>。仁宗朝において、知審刑院などの司法関係の重職を歴任し、高官のための館職である龍図閣直学士を与えられ、位階は礼部侍郎まで進んだ。政務の一方で、潮の満ち干の研究や、儀礼に使用する指南車、刻漏（水時計）の製作を行うなど天文地理や工学的な面にも詳しくあった。その多彩な経歴の中で画も善くし、李成の影響を受けた山水寒林を得意とした。自らの赴任した太常寺や刑部の障壁に寒林や山水を描き、翰林学士院玉堂の玉座の「山水図屏風」を手がけたことは<sup>(58)</sup>、宮廷や中央官庁における李成派障壁画の先駆となった。

許道寧（九七〇頃―一〇五二頃）は、出身は河間（河北省）とも伝えられるが、主に長安（陝西省西安）で活躍した<sup>(59)</sup>。生涯、在野の画家であったが、仁宗朝の宰相・張士遜（九六四―一〇四九）をはじめ、多くの有力政治家・官僚たちの愛顧を受けたことが知られている。長安の庁舎内にあった涼榭に、終南山と華山の壁画を描いたほか、後年には開封でも活躍し、康定元年（一〇四〇）に塩鉄判官となった富弼（一〇〇四―八三）の依頼で、省中に「松石壁画」を描いている<sup>(60)</sup>。彼は特に林木、平遠、野水に優れたとされ、伝称作品の「秋山蕭寺図卷」（藤井斉成会有鄰館、図2）は、卓越した淡墨技法によってその画風を髣髴させる。

北宋中期に李成の画風を学んだ画家としては、許道寧、李宗成、翟院深の三人が名高く、中でも許道寧が李成の「氣」を得たとして最も評価され、李宗成は「形」を、翟院深は「風」を得たと評された<sup>(61)</sup>。李宗成は、北宋後期まで活躍し、神宗の命で、郭熙らと宮中の屏風制作を行ったことが知られている<sup>(62)</sup>。翟院深は、李成と同じ營丘の出身で、郡の樂人を務めつつ、李成の画風を慕ったことは、同地に彼の画蹟や画風が保存・継承されていたことを示す点で重要である<sup>(63)</sup>。

『聖朝名画評』李成条には、景祐年間（一〇三四―三八）に、李宥が開封尹となった際、相国寺の恵明という僧に命じて李成の作品を倍の金額を出して買い集めさせたため、世間には李成画が少なくなったとの逸話が載せられている<sup>(64)</sup>。「李公墓誌」には、官歴を列記する箇所に、「知開封県」を務めたとあり、その折のことと考えられる。北宋も後期になると、文同（一〇一八―七九）、蘇軾（一〇三六―一一〇一）をはじめとする文人士大夫たちが、自

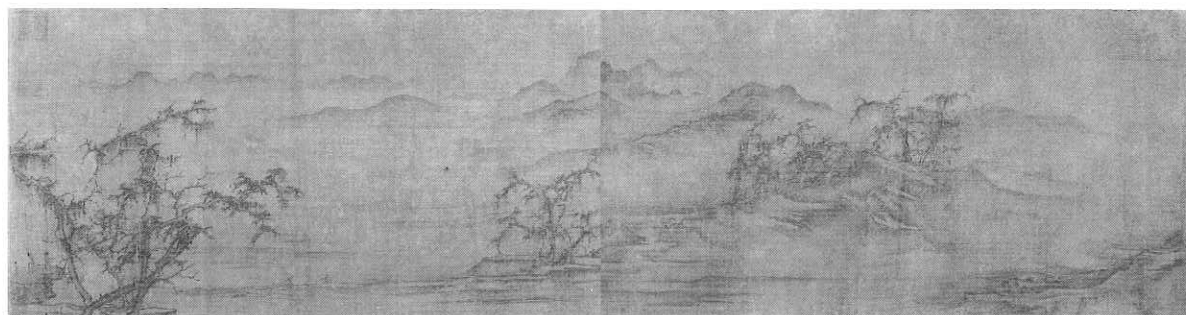


図2 (伝) 許道寧「秋山蕭寺図卷」(藤井斉成会有鄰館)



娯に画筆を取り、親しいものにも贈答する文人画の確立期を迎えるが、李宥の頃には、燕肅がすでに大官として庁内に障壁画を描いていたもの、それはまだごく珍しいケースであった。ましてや、祖父には孫四皓との屈辱的な逸話も伝わっていたことからすれば、その画蹟が人間に流布していることへの抵抗感は根強く、開封県の知事となった機会に、骨董の大規模な市が開かれる相国寺の僧に依頼して画蹟の回収を図ったのである。『聖朝名画評』は、この収集の際に翟院深の作品が多数、李成画と誤られて購入されたとも指摘している。李成画の評価の高まりと、それを学ぶ画家の増加によって、亜流作や贋作の横行は避けられないものとなっていた。李宥の画蹟回収によって、李成の真蹟が世の中から減った一方で、亜流作や贋作への需要は増加していき、北宋後期の米芾（一〇五一―一一〇七）の「無李論」<sup>(66)</sup>にいたるのである。

李宥はその後、知蘄州、提点荊湖北路刑獄、権戸部判官、利州路転運使、判戸部勾院などの差遣を務め、ついで高官への足掛りとなる修起居注、知制誥となり、この間に大理寺丞、殿中丞、太常博士から、祠部・度支・司封員外郎、祠部・刑部郎中へと位階を重ね、さらに諫議大夫を与えられた。判尚書礼部太常寺の後、集賢院学士を加えられ、知江寧府となり善政に務めたが、府舎火災の責任をとって秘書監に降格されて致仕した。<sup>(67)</sup>その後、分司南京、判留守司御史台などの名誉閑職を与えられ、皇祐元年（一〇四九）、六二歳で没した。学識を認められ、科挙官僚としての出世コースを順調に歩み、晩年は不遇であったものの、父以上の出世を果たした。

李宥には忱と恂という二人の息子がおり、忱が張方平に墓誌銘を依頼した。その中では、李成の画家像は次のように語られている。

祖成、太子洗馬を贈らる。<sup>(68)</sup>乱世に仕えず。懐を詩酒に放ち、逸民と遊ぶ。山水を酷嗜し、能く其の幽深の趣を図す。之を尺素に摂り、無涯の遠を極む。天下の名筆、其の髣髴を得る莫し。故に世以て神妙と為す。

「乱世に仕えず」というのは、『論語』などにもあるように儒者にも許容される処世態度であり、「之を尺素に摂り、無涯の遠を極む」として平遠山水を善くしたことも語られている。さらに、「天下の名筆」であり、髣髴とさせるものではなく、世の神妙となすところであると称揚している。墓誌という性格を考えれば、張方平は依頼者である李宥の子孫たちの意に沿うように文章を綴ったはずである。『揮麈前録』などに節録された李成の墓誌も、これほど直接的な賞賛は与えていない。李覚、李宥、そしてその子たちへと代を重ねるうちに、世間における李成の評価は拡大し、子孫においても一族の系譜の中で誇るに足るものとなっていたことがうかがえる。

仁宗の治世は、李宥が没してからなお一四年続く。再三取り上げている『聖朝名画評』が成立するのも、嘉祐元々四年（一〇五六―五九）頃である。ただし、ここで注意が必要なのは、この時期にいたってもなお、李成とその家系についての正確な情報が、世間に広く浸透していたとは考えにくいことである。先述の孫四皓が李成を招いた逸話は、開宝年間のこととされており、それより前の乾徳五年に没したとする李成の墓誌の情報が反映されていない。著者・劉道醇は、大梁（開封）の人という以外、経歴不明で、一介の士人が李成の生涯に関する正確な情報を入力することは困難だったとみられる。

このことは、北宋中後期の政治家・文豪である歐陽脩（一〇〇七―七

(二)の記述からも裏付けられる。『帰田録』(一〇六七年序)巻二において、李成が「尚書郎」に至ったと述べており、後に『澠水燕談録』と『揮麈前録』から誤りであるとの指摘を受けている。欧陽脩は、李宥と同僚だった時期があるが、そのような間柄でさえ、情報が曖昧であったとすれば、劉道醇においてはなおさらであったと言えよう。

ともあれ、『聖朝名画評』の逸話は、李成の文人画家像を語る上で、格好の材料となっていた。北宋後期に成立した郭若虚『图画见闻志』李成条にも、「開宝中、都下の王公貴戚、屢しば書を馳せ延請するも、成多く答えず、学は人の為ならず、自ら娛むのみ。後に淮陽に遊び、疾以て乾徳五年に終る」として、没年との矛盾が解消されぬまま併記されている。北宋晩期の『宣和画譜』巻一一、李成条においては、開宝の年号は省略された上で、話の細部には、より脚色が加えられていく。李覚・李宥の科擧官僚としての出世は、李成の伝記を世に残したのみならず、李成が儒者であることにも一定の説得性を与えたであろうが、一方で、その正確な情報が必ずしも広範には伝わらなかつたために、かえつて事実関係の曖昧な本逸話が流布することとなり、李成の文人画家像形成に大きな影響を与えたのである。

李成評価の高まりは、当時の書画収集に関する文献からもうかがえる。北宋中期の詩人・梅堯臣(一〇〇二〜一〇六〇)には、士大夫たちの収蔵についての詩があり、その中に李成画が含まれている例がある。「観邵不疑学士所藏名書古画」は、邵必(字・不疑)のコレクションに関して「巨然 李成は、落筆愈いよ奇異」として、巨然画などともに言及している。また、「観楊之美画」は、楊之美という人物の所蔵について、「李成山水晚景」を、閻立本、呉道玄などの唐画や黄筌画とともに詠っている。

さらに彼は、友人の江休復(一〇〇五〜一〇六〇)とともに、宮中の書籍、書画を収める三館の曝書会を観覧し、その模様を詠っている。夥しい数の書画骨董が陳列されていた中で彼が名前を挙げたのは、王羲之・猷之の墨蹟や、唐の戴高の「牛」、黄筌の「白兔図」、そして李成の「寒林図」であった。この頃には李成画は、北宋前期に既に秘閣に蔵されていた唐以前の書画や蜀の黄筌と並んで、宋王朝が収蔵し士大夫たちにも披露すべきものとなっていたことが分かる。

前出の欧陽脩『帰田録』の記事は、北宋中期末の李成画の流布状況を知らずとも興味深い。

近時の名画は、李成、巨然の山水、包鼎の虎、趙昌の花果なり。「李」成、官は尚書郎に至る。其の山水寒林は、往往にして人家之有り。巨然の筆は、惟学士院玉堂北壁独り存す。人間復た見ざるなり。

近頃の名画として、山水画家では李成と巨然を挙げ、李成の「山水寒林」は、あちこちにあるのに対して、巨然の画は翰林学士院玉堂に残るのみで、世間ではほとんど収蔵していないと対比的に述べている。北宋初期の蜀や江南画の優位から状況は大きく変化していた。北宋中期における李成の画名は、欧陽脩のような大官たちにも浸透しており、それが続く北宋後期の郭熙登場の基盤にもなっていく。

#### 四 北宋後期以降の李成評価拡大と曾孫

北宋後期は、国初以来の様々な矛盾が表面化し、西夏対策の軍事費の増加が拍車をかけ、財政難への対応が急務となっていた時期である。

仁宗の養子として即位した英宗（在位一〇六三〜六七）が、わずか四年で崩御すると、神宗（在位一〇六七〜八五）が二十歳で帝位を継いだ。若くして改革を志す神宗は、王安石（一〇二一〜八六）を登用して新法と称される一連の改革を実施し、これによって財政は好転に向かった。この進取の気性に富んだ皇帝のもとで、李成派の地位を大きく向上させることになった画家が郭熙であった。彼の中央画壇への進出については、息子で科挙官僚となった郭思が父の山水画論を編纂増補した『林泉高致』の「画記」に詳しく、当時の宰相クラスをはじめとする大官たちがパトロンとなっていく様がありありと記される。<sup>86</sup> 治平四年（一〇六七）末から翌年にかけて郭熙の郷里の河陽（河南省）の知州となっていた元老の富弼（一〇〇四〜八三）が、彼を上京させ、三司使の呉中復（一一〇一〜九八）に召されて省壁に描いたのを皮切りに、開封尹の邵亢（一〇一四〜七四）に請われて府庁に「雪屏」を、続いて都水監に「松石屏」を作った。さらに、塩鉄副使であった呉充（一〇三一〜八〇）の求めで庁壁に「風雪遠景屏」を、同じく彼の要請で諫院に「風雨水石屏」を描いた。また、富弼とともに仁宗の宰相を務め神宗の時代にも元老として力を持った文彦博（一〇〇六〜九七）も、彼に祝寿の作を描いてもらっている。<sup>87</sup> 郭熙の都での活躍は、このように大官たちが官庁に壁画を描かせたのに始まるが、その登用の背景について、彼ら士大夫の山水画鑑賞の面から、もう少し遡って考えてみたい。

先にも述べたように富弼は仁宗の康定元年（一〇四〇）、三司の塩鉄判官となった際、許道寧に省中の「松石・山水壁画」を描かせていた。時の宰相・張士遜（九六四〜一〇四九）の愛顧を受け「李成世を謝り范寛死し、唯だ長安の許道寧有るのみ」と称された彼の抜擢は、当代山水画の第一人者として認められてのことであつたらう。その後、皇祐五年

（一〇五三）頃に三司の権度支判官となった劉敞（一〇一九〜六八）が、この壁画を愛玩し次の詩を作った。

度支庁事の許道寧の画ける松石に題し、彦猷、鄰幾、直孺に呈す<sup>88</sup>

長松 森として依る無く

蒼石 儼として相對す

自然 山林の氣

天壤の外に出づるが若し

許生 筆は妙絶

今世 殊に輩少なし

発揮は意表を得

瀟洒は神と会す

炎熱 五月の交

塵土 九衢の内

微風 臆を度つて来たり

左右 天籟を含む

下に漁樵の翁有り

生事 尤も愛す可し

茅茨 乍ち隠見し

吠畝 更にも向背す

吾廬 若し此を弁ずれば

軒冕 本より頼まず

願わくは二三子を従え

相ともに駕して言に適かん<sup>89</sup>

描かれていたのは、天へと幹を伸ばす長松と、鬱蒼とした大石であった。先に挙げた許道寧の伝称作品「秋山蕭寺図巻」には、三箇所にわたって寒林が配され、龍のように極端に長く幹を伸ばす枯木が描かれる（図3）。その表現は、李郭系作品の中でも特異なもので、許道寧画の特徴と見られ、本詩の「長松」もこのような姿であったかと推察される。許道寧の当代きつての能筆ぶりを讃えた上で、詩はより深く画に踏み込んでいく。今は五月の暑い盛りだが、この庁舎のなかは薄暗く、窓から微風が漂ってくれば、さながら松籟の響きが聞こえてくるよう。松下には漁師と樵の老人がいて、茅屋や畑も見え隠れしている。もし、ここには分の草庵を見出せたなら、官位にしがみついている気はもとより無い。願わくば気心の知れた君たちと、一緒に車を駆って出かけようではないかと、山野へのあこがれを述べている。松に風を詠い込むのは唐代以前からの伝統であり、李成派の松石図が、当時どのように鑑賞されていたかという点でも興味を持たれる。

この詩は彼と親交のあった梅堯臣と韓維（一〇一七〜九八）の知るところとなり、両者が和韻した。まず、梅堯臣は次のように応じた。

韻に依り原甫の省中松石画壁に和す  
富彦国省判為りし日、許道寧をして画か  
しむ<sup>(22)</sup>

山林と城闕

事物 相い対せず

唯だ聞く 道義を乗れば

所處 内外無し

〔中略〕



図3 「秋山蕭寺図巻」部分

省闕の蔽なるに当たると雖も  
晦昧 何に頼らんと欲するや  
今茂陵の人に逢い  
独唱も亦た豪邁たり

山林と都城とでは事物はまったく異なると言っても、あるべき道義に則れば、居所が都の内か外かは関係ないというではないか（平安は心の持ち様でどこでだって得られる）。とはいへ宮中は厳かで、私のような愚昧には心もとない限りである。今、長安出身の許道寧（の画蹟を詠んだ君の詩）に接し、私の詩も気分が大きくなりましたと結ぶ。

次に韓維の詩である。

原甫と同一度支庁壁許道寧画松に奉ず依韻<sup>(98)</sup>

長松 青冥に盤まり

鬱として窓戸と対す

〔中略〕

翛然たり 簿書の暇

恍として 巖壑の内の若し

手を挙げて 紫烟を捫で

耳を側だてて 清籟を聴く

蒼林と老石は

野性 旧と愛する所

一たび都邑に官たるに従えば

茲の遊 頗る乖背す

此れに寤寐の懐を慰めらるれば

典刑も亦た頼るに足る

幸に塵壁を掃するに当らば

駕を促して 我其れ適かん

帳簿に目を通して合間、思わず画に魅せられれば、庁舎のうちはまだ寒松の生えた谷中のよう。本当の霞かと手でなで、清らかな松籟に耳を傾ける。山水は、もとより愛すべきものではあるが、一旦、都に官を得たならば、そこで遊ぶことは節義にもとる。だから、その憧れをこの画でなくさめよう。そうすれば道義にかなった官仕えも頼みとするに足るではないか。もしこの壁画の塵を払ってくれる機会があったなら、私も車に飛び乗って画を見に行こうではないか。

劉敞が山水への憧れを述べたのに対して、梅堯臣と韓維は、その思いを受け止めつつ、士大夫としての務めに相反することを指摘し、この画を鑑賞することで思いを慰めようと呼びかける。その言葉は、郭熙が『林泉高致』山水訓において山水画の愛好される理由を説いた次の有名な記述と重なり合う。

君子の夫の山水を愛する所以の者は、其の旨安くにか在る。丘園に素を養うは、常に処る所なり。泉石に嘯傲するは、常に楽しむ所なり。漁樵の隠逸は、常に適しむ所なり〔中略〕。直に太平の盛日、君親の心両ながらに隆んなるを以て、苟も一身を潔くせんとすれば、出処の節義は斯に係る。豈仁人の高踏遠引して、離世絶俗の行為を為さんや〔中略〕。然らば則ち林泉の志、烟霞の侶、夢寐に在りて、耳目は断絶す。今妙手を得て、鬱然として之を出せば、堂筵を下らず、坐ながらにして泉壑を窮め、猿声鳥啼、依約として耳に在り、山光水色、滉漾として目を奪わん。斯れ豈人意に快よくして、実に我が心を獲るにあらずや。此れ世の夫の画山水を貴ぶ所以の本意なり〔後略〕。

太平の世にあつて、忠孝を尽くすことが本義である士大夫たちの、山林への憧れを癒すために山水画があると郭熙は言う。この仁宗後期、彼はちょうど李成画風を学んでおり、士大夫の間で活動を始めていたことが知られている。黄庭堅（一〇四五―一〇五）が、蘇轍（一〇三九―一一二）からの伝聞として記録するところによれば、郭熙は詩と書で知られる蘇舜元（一〇〇六―五四）家のために六幅の李成の「驟雨図」を模写したことで、大いに画技が進んだという。筆者は前稿で李成の平遠の意味について考察を加え、それが、士大夫たちの憧れる脱俗の理想郷のイメージであることを論じた。郭熙は、彼らとの交流を通じて李成画を学んでいく中で、その画に込められた意味への理解をも深めていったのであろう。

このように見てくると、許道寧から郭熙へと至る李郭派の伸張には、次のような経過が浮かび上がってくる。北宋中期に李成画が流行していくなか、その画風を受け継ぎ需要に応える画家が求められた。それは、許道寧を筆頭とする李成派の勃興と呼応していた。士大夫たちは、私邸などでの個人的な鑑賞のみならず、それを勤務する庁舎へも持ち込んだ。太常寺、刑部、翰林学士院玉堂の障壁画を描いた燕肅は、その先鞭を果たしたと言えるが、許道寧が三司の壁画を描いた康定元年（一〇四〇）に没している。富弼による許道寧の抜擢は、その流れを引き継ぐものであったとも言えよう。しかし、神宗が即位したときには、その許道寧も既に没していた。新しい体制のもと、許道寧に代わって彼らの要求を満たしてくれる画家、それが郭熙だった。

郭熙の中央画壇での活躍を支えたのは、李成や許道寧を愛好していた士大夫たちであり、彼らは当時の政界の頂点に立つ人物でもあった。郭熙を上京させた富弼は元老として神宗初期の宰相に任じられており、文

彦博も英宗の時から引き続き枢密使を務めていた。また、許道寧の壁画に詩を寄せた韓維は、神宗の皇太子時代からの教育係で、即位後は翰林学士として活躍した。邵元も、神宗に早くから仕え、その即位後には龍閣直学士の館職を与えられ、開封の知事から次いで枢密副使に移っている。なお、彼は梅堯臣によって書画の収蔵を詠われた邵必の甥である。神宗の周囲の高級官僚たちが、李成や許道寧、郭熙の愛好者であったことは、若き皇帝自身にも影響を与えずにはおかなかったであろう。

その中でも、塩鉄司の「風雪遠景屏」と諫院の「風雨水石屏」を郭熙に描かせた呉充は、新法・旧法両党の対立下にあつて中道派として、王安石引退後の宰相に抜擢された人物で、その夫人が李宥の娘、つまり李成の曾孫だった。彼女が呉充に嫁いだことは、「李公墓誌」に明記されている。米芾（一〇五一―一一〇七）の『画史』には、慈聖光獻太后（一〇一六―七九）が、李成の画風を好んだ孫の神宗のために李成画の屏風を献上しようとした際、彼女に鑑定させた逸話が記されている。

余の家所收の李成、李冠卿大扇、之を愛して已まず、天下の冠と為すに至る。既に之を購得し、真州に背す。昭宣使宋用臣、舒州より召還されて之を見、太息して云う、慈聖光獻太后、上の温清の小次に尽く李成の画を購ひ、屏風に貼成す。上の好む所を以て、輒ち之を玩するに至ると。呉丞相冲卿「充」夫人入朝するに因り、太皇真偽を引弁せしむ。成の孫女なればなり。内四幅を以て真と為し、拆奉して上る。別に購つて之を補う。宋用臣に敕して内東門に背せしむ。正に此と類す。因て語泫然たり。吾が愛惜するところを囑むと。余も亦之を甚だ珍とす。

この話は、神宗に仕えて器用、建設のこゝを受け持った宦官・宋用臣<sup>(10)</sup>が語ったものである。慈聖光獻太皇太后は仁宗の曹皇后のことで、養子の英宗を補佐して垂簾聽政を行った。英宗の長子である神宗は、太皇太后への孝養を尽くし、太皇太后もまた政務から遅くに戻ってきた帝のものとを訪れ、自ら食事を供したという<sup>(11)</sup>。この李成画をめぐる逸話も、二人の親愛を伝えている。健康を気遣つて来訪する帝を喜ばすために、彼女は神宗が好む李成の画を買い集めさせ屏風にしたのだった。神宗が李成の画のどのような面を好んだかまでは記されていないが、多忙な政務の暇に祖母を訪い、そこで鑑賞された李成画は、士大夫に愛されたのと同様に松石や平遠山水による清趣溢れるものであったと推察される。ただ、米芾をして「偽は三百本を見たり」(『画史』)と言わせるほど贋物の多かつた李成画だけに、太皇太后も真贋を見極めたかつたのである。李成の曾孫女に鑑定を命じたのであった。彼女が鑑定眼を養うことができたのは、父・李宥の収集した多数の家蔵の李成画によつてであることは容易に想像される。李成の子孫は、単に画蹟を世の中から回収したわけではなく、祖先の画に敬意を払いその絵についての鑑賞眼をも養つていたのである。贋作の多い李成画の中から信じるべき作品を選び出し、示したことは、皇帝の鑑賞眼にも影響を与えたであろう。少なくとも、神宗とその周囲の人々にとつて、李成は単なる伝説の画家ではなく、その血脈を今に伝える存在であつた。

大官たちに見出され、壁画の要請に次々に応えた郭熙は、神宗の認めるところとなり、御書院芸学からさらに待詔に進み、景靈宮十一殿の「屏面大石十一板」、紫宸殿屏、化成殿壁「松石」「溪谷」等、睿思殿(涼殿)の「松石平遠四面屏風」など宮中関連の数々の障壁画を手がけていく<sup>(12)</sup>。郭熙の現存唯一の真筆である「早春図」(台北故宮博物院、図4)は、

熙寧五年(一〇七二)の作であり、李成画の精緻な淡墨技法という美質を受け継ぎながらも、北宋華北山水画のもう一方の大家である范寛の高遠画風を積極的に取り入れている。彼自身が『林泉高致』で説くように、皇帝になぞらえられる主山を中心に、群臣が周囲を支えるように峰々を配し、広大な山水空間を描き出している<sup>(13)</sup>。李成画を愛好していた神宗にとつても、郭熙の画は従来の李成画風とは一線を画す、皇帝のための新たな絵画様式の創出と映つたに相違いない。

元豊年間(一〇七八〜八五)になると、王安石は政界を退き、神宗は新法によつてできた蓄財をもとに、自ら宋王朝の威信拡大を図つていく。複雑化していた官制の改革に着手し、それに合わせて官衙の大改修を実施する。郭熙は、その新たな殿舎の障壁画を次々と手がけていった。葉夢得(一〇七七〜一一四八)によれば、禁中に置かれた中書省、門下省、樞密院、学士院の障壁画は全て郭熙の筆であつたという<sup>(14)</sup>。元豊六年



図4 郭熙「早春図」(台北故宮博物院)

(一〇八三)頃には、その締めくくりとも言うべき翰林学士院玉堂の「春江曉景図屏風」を描き、蘇軾らの翰林学士たちに感銘を与えた。<sup>⑩</sup>

同時代に成った郭若虚『图画見聞誌』(一〇七四年序)巻四、郭熙は「管丘を学び慕うと雖復も、亦た能く自ら胸臆を放ち、巨障高壁、多益ます壮んにして、今の世に独絶為り」として、李成を学び、大画面の障壁画を得意とし、当世に並ぶものがないと賞讃している。同書はまた巻一「論氣韻非師」において、絵画にとって最も重要な氣韻は生来のもので、人品の高さに基づくとして文人画の優位性を唱え、画家伝においても文人画家と職業画家を区別した。李成は巻三「高尚其事、以画自娛者」の部に入れられており、儒者の家系に生まれ、作画は自らの娛しみのためであったとして、文人画家像が語られている。しかし、巻一、「論三家山水」では、関仝・范寛とともに三大家として並列に扱うに留まっている。それは、関仝には劉永、范寛には紀真などの継承者がおり、唐末からの画史を綴った郭若虚には三家の系譜が認識されていたことが主因であろう。ただ、これに加えて、李成の影響を受けた文人画家は、燕肅と瀟湘八景の創始者で仁宗朝より活動を始めている宋迪が、巻三「王公士大夫」の部に入れられているのみで、彼らに続く世代の画家が挙げられていないことも一因と思われる。

李成への評価がさらに高まるのは、次の哲宗になってからである。元豊八年(一〇八五)、神宗が、病のため三八歳の若さで崩ずると、哲宗(在位一〇八五―一一〇〇)が一〇歳で即位した。幼少の帝に代わり祖母で新法には批判的な宣仁太皇太后が摂政となり、旧法党の人々が呼び返される。元祐更化と呼ばれるこの時期には、蘇軾を中心とする文人士大夫たちが都で盛んに詩書画の交わりをもった。神宗の妹・蜀国長公主(一〇五一―八〇)の婿となり駙馬都尉を与えられた宗室画家の王詵

は、李成を学ぶとともに古様な青緑山水を復興し、北宋山水画に新たな展開を生み出した。伝称作中の最優品である「煙江疊嶂図巻」(上海博物館、図5)から、それは唐以前に青緑技法で描かれることの多かった神仙山水のイメージを李成画風に導入し、幻想的な理想郷を描いたものだったと考えられる。<sup>⑪</sup> 彼は文人たちのパトロンの存在でもあり、自邸の西園に蘇軾、李公麟、米芾らの名士を招いたという「西園雅集」の伝説も、その交友に基づいている。<sup>⑫</sup>

王詵は、書画の収集も豊かであり、北宋晩期の韓拙によれば、家蔵の李成の平遠山水と范寛の高遠山水を東西に掛け並べ、両者の画風を「一文一武」と評したという。<sup>⑬</sup> 李成の精緻な筆墨による清澄な平遠山水を「文」とし、范寛の雄大で氣勢に富む高遠山水を「武」として対比させたことは、李成画に対する当時のイメージを知る上で重要であるとともに、李成の文人画家像との関連からも注目される。

李成派文人画家の活躍によって、そ

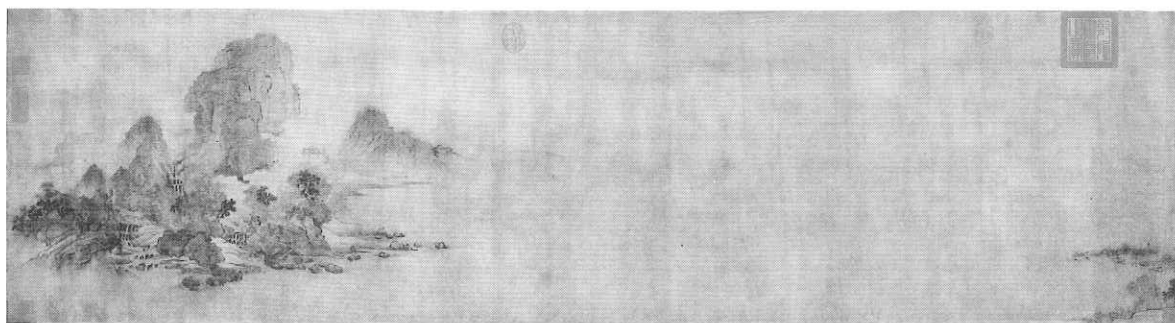


図5 (伝) 王詵「煙江疊嶂図巻」(上海博物館)



の系譜がより明確に認識されるようになるのもこの頃である。米芾は、燕肅、宋迪、劉忱(明復)が、李成を学んでいるとし、王誥についても、その皴法や平遠表現が李成画風に基づくことを指摘する<sup>(10)</sup>。元の湯屋『画鑑』によって、李成派に数えられ、「山水図」(プリンストン大学美術館、図6)が現存する李公年も、哲宗朝以降の中級官僚である。

劉忱は、画史類では字の明復で知られ、元祐年間には直龍閣の館職を持っていた<sup>(11)</sup>。北宋後期の馮山(？〜一〇九四)が、劉忱に山水画を請うた長詩「劉忱明復龍閣に画山水を為るを求む」があり、そこには北宋の画家たちが多数登場する。

#### 〔前略〕

营丘李成は絶迹と称せらる  
峰崑は秀拔 常模に非ず  
穆之は灑落 亦た其の亜  
玉堂の屏上 瀟湘の図  
董 屈 許 范 凡そ数輩  
隱隱として俗気 肌膚に蔵す  
乃ち知る山水 絶品に係れば  
筆墨造化は功夫に非ず  
要は之れ文章の緒余  
世上の真巧は吾が儒に帰す

#### 〔後略〕

李成を「絶迹と称せらる」と評価するとともに、燕肅は灑落としており、李成に次ぐとする。一方で、董(源)、屈(鼎)、許(道寧)、范(寛)

の諸家には、俗気があるとより低く評価する。その上で山水画の本質は技巧ではなく、文章の余りが画になるのだとし、それができるのは儒者であるとして、文人画の優位を主張している。北宋後期は、米芾や沈括らによって、江南山水画の祖である董源が一世に評価され、後世の南宗画観の基礎が作られた時期だが、本詩では李成を学んだ劉忱を讃える意味からも、李成が最も高い評価を受けており、当時の李郭派流行を物語るものとなっている。

元祐八年(一〇九三)に宣仁太皇太后が崩じ、哲宗が親政に乗り出すと新法党が政権に復活する。しかし、七年後の元符三年(一一〇〇)、帝は二五歳の若さで崩御し、弟の徽宗(在位一一〇〇〜一一二五)が一九歳で即位した。芸術家肌で政治には向かなかった徽宗は、蔡京(一一〇四〜一一二六)を宰相に任じると、自らは書院、画院の制度を整備し、画家の待遇を改善するなど、文芸の向上に努めていく。制作活動だけでなく、収蔵にも力を入れ、書・画・金石類の目録である『宣和書譜』、『宣和画譜』、『宣和博古図』が相次いで編纂される。この『宣和画譜』(一一二〇年序)において、李成は山水画史上最大の画家として位置づけられるにいたった。卷一〇、山水叙論は次のように山水画の歴史を略述する。



図6 李公年「山水図」  
(プリンストン大学美術館)

「前略」唐より本朝に至るまで、山水を画くを以て名を得たる者、  
 類ね画家者の流に非ずして、多く縉紳士大夫に出づ「中略」。本朝  
 に至りて李成一たび出づるや、荆浩に師法すると雖も、出藍の誉れ  
 を擅にし、数子の法、遂に亦た地を掃いて余り無し。范寛、郭熙、  
 王誥の流の如き、固より已に各自名家にして皆其の一体を得るも、  
 以て其の奥を窺うに足らず「後略」。

文人優位の山水画観に基づいた上で、李成を最大の影響力を持った画  
 家と語るのは、郭熙の活躍に加え、燕肅以来の文人画家たちの多くが李  
 成を学んできたことによるのであろう。同書、卷一一、李成条において  
 も、彼の文人画家像が、『聖朝名画評』、『図画見聞誌』以上に言葉を尽  
 くして語られる。「父祖は儒学吏事を以て時に聞こゆ。家世中ごろに衰  
 え、成に至りて猶能く儒道を以て自業す。善く文を属し、氣調凡ならず。  
 而して磊落にして大志有り」として祖父・父のみならず李成自身も儒者  
 であつたとし、さらに孫氏が李成に画を描かせようとした例の逸話で  
 も、誘いを断る李成の言葉に、琴を善くした東晋の戴逵が武陵王からの  
 招きを受けた際、その使者の前で琴を打ち碎いたという故事を加え、説  
 話の印象を強めている。

李成画に対する高い評価は、著録される収蔵作品の点数にもうかがえ  
 る。同書は、一五九点の李成画を著録しており、記載された山水画家の  
 うち最多を誇っている。二位は許道寧の一三八で、以下、巨然一三六、  
 王維一二六、関仝九四、董元（源）七八、范寛五八、燕肅三七、王誥三  
 五、宋迪三一、郭熙三〇、荆浩二二と続く。全てが真筆とは到底考えが  
 たいが、李成系の許道寧が次点で、関仝、范寛も上位にある。文人画の  
 祖として人気があつた王維は、唐代にもかかわらず四位を占める。また、

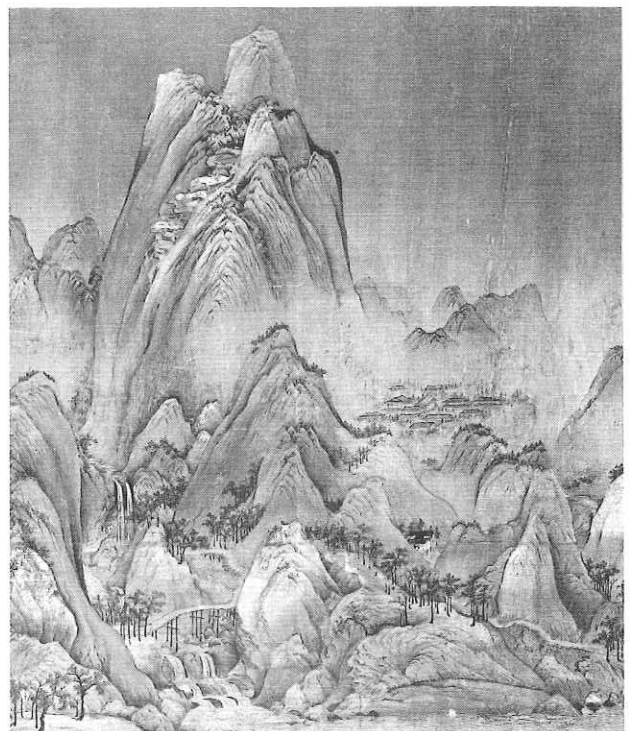


図7 (伝) 王希孟「千里江山図巻」部分  
 (北京故宮博物院)



図8 「岷山晴雪図」(台北故宮博物院)

宋初に活躍した巨然とその師の董源が多いのは、北宋後期以降の江南山水画再評価の反映とみられる。

けれども、徽宗朝における圧倒的な評価獲得の一方で、李郭画風の画壇における影響力は次第に弱まっていったように見える。徽宗画院にも李郭系の画人がいたことは文献から窺えるが、花鳥、人物などにも多彩な画人を擁するうちの一角にとどまり、范寛を学んで次の南宋院体画様式の主導者となる李唐も現れている。実作品についても、先述の李公年の「山水図」をはじめ、画院画家・王希孟の大作「千里江山図巻」(北京故宫博物院、図7)、欠名ながら郭熙の次の世代の作と見られる「岷山晴雪図」(台北故宫博物院、図8)など、現存する作例は比較的多くなってくるが、それらを見ても、前二者には江南山水画の董源や巨然の山形が折衷されており、郭熙画風との類似が顕著な「岷山晴雪図」にも、画面片側に景物を集中させる南宋院体画の対角線構図への志向が既に表れている。

李郭画風をめぐる状況は多様化し、山水画全体の様式も徐々に変化しつつあった。それは、徽宗の失政が招いた金(一一一五―一二三四)の侵攻、靖康の変(一一二六―二七)による北宋の滅亡で、否応なしに加速されていった。その後、李郭画風は、むしろ華北を版図に加えた金の画家たちに受け継がれ、元代李郭派へと橋渡しがなされるが、南宋においては院体画の一部の皴法や道釈画の背景などにその影を留めるものの、積極的な様式展開は見られなくなっていく。宋初に端を発し、時間とともに影響力を強めていった李成画風の宋代絵画史における役割は、北宋末をもって一つの節目を迎えたといえよう。

## おわりに

北宋における李成評価の高まっていく過程を、その子孫と鑑賞者、李郭系画家との関係からたどってきた。北宋の初めに世を去った李成の評価が顕著になってくるのは、真宗以降である。仁宗になると収蔵や鑑賞の記録も増え、燕肅や許道寧ら、李成系の画家も活躍しだす。李成とその後継画家たちは、画院とは異なる土壌で士大夫に愛好されてきた。一方、李成の子孫たちは、李成の画名が高まっていく環境下に、自らも士大夫やその妻として生涯を送った。李覚が仕官を果たし、太宗に見出されていなければ、李成の詳しい伝記が残ることはなかったであろう。さらに、李宥が父以上の出世を果たしたことによって、その儒者としての家系は、李成の文人画家像にも影響を与えたのだった。また彼による李成画の収蔵は、真蹟の流布を減じる一方で、一族の鑑賞眼を養い、神宗の李成画愛好とも関わりを持った。それは、関仝、范寛、董源、巨然といった他の同時期の大家たちとは際立って異なる条件であったと言っよい。

このように見るならば、後世に李郭と並び称され、董巨派とともに中国山水画を代表する画系となるに至った基礎は、単に後継の画家たちの活躍だけではなく、李成画を愛好し、その画風を受け継ぐ画家にも活躍の場を与えた鑑賞者たち、そして家名を存続させることで李成の歴史的存在を示し続けた子孫たち、この三者によって築かれたのだといえよう。それが、神宗という改革を志した英邁な皇帝と、李成画風の傑出した後継者である郭熙との出会いによって、それまで士大夫のものであった李成画風が、彼らの支える皇帝をも象徴する、つまり北宋という文治主義国家の世界観を表象する絵画にまで登りつめたことは、むしろ当然

の帰結であったように思われる。

靖康の変から約半世紀を経た南宋中期のはじめに、北宋後期から約百年間の画史を綴った鄧椿『画繼』(一一六七年序)は、故事を載せる巻九、論遠で、李成の寒林図について次のように述べている<sup>(1)</sup>。

李宮邱、多才足学の士なり。少くして大志有るも、屢しば挙第せず、竟に成る所無し。故に意を画に放つ。其の作る所の寒林は、多く巖穴中に在り、裁筍俱露、以て君子の野に在るを興す。自余の窠植は、尽く平地に生え、亦以て小人の位に在るを興す。其意微なり  
〔後略〕。

北宋に形成された李成の文人画家像を踏襲した上で、その寒林が巖穴中に生えているのは、世に挙げられない君子の象徴であり、平地に生える樹叢は小人を表しているのだとする。この比喻の淵源は、西晋の左思が、門閥貴族全盛の世にあつて、寒門出身者は才能があつても重用されないことを、山上の小さな苗に頭上を覆われている谷底の松に喩えた「澗底の松」にあり、さらに、巖穴中に生じたために奇怪な姿となった松に晩唐の争乱期を隠逸文人として生きる自己を重ねた陸龜蒙の「怪松図賛」の影響も加わっている<sup>(2)</sup>。一方で、「喬松平遠図」の弧線を描いて上方に伸びる土坡は、他の李郭系作品にも多く用いられているが、それは、唐代樹石画の画面構成を受け継いでおり、「澗底の松」のイメージとも結びつけられてきた表現であつた<sup>(3)</sup>。

それらを踏まえれば、この『画繼』の一文は、李成の創り出した樹石山水画が、主題的にも表現的にも唐代樹石画の伝統に連なるという歴史的位置を看破したといつてよい。南宋では、李郭画風は積極的な展開を

見るには至らなかつたが、元に入ると、南宋出身の趙孟頫(一二五四—一三二二)が先鞭となり、元代李郭派と称される画家たちが輩出している。『画繼』の記述は、このような元以降の李郭画風の流行やその意味を考へる上からも注目されるが、それらへの検討は今後に期したい。

註

(1) 拙稿「伝」李成「喬松平遠図」(澄懷堂美術館)について—唐代樹石画との関係を中心に—(『国華』一三六九号、二〇〇九年)。

(2) 李成の伝記については、早くに山本佛二郎、紀成虎「李宮邱」(『宋元明清書画名賢詳伝』巻一、丙午出版社・文求堂、一九二七年。思文閣、一九七三年復刻)、謝稚柳「論李成」(『中国画』創刊号、中国古典芸術出版社、一九五七年)があり大要が語られている。何惠鑑氏は、さらに幅広い文献を用いて詳細な考証に努められた。「李成略伝」(李成与北宋山水画之主流上篇)(『故宫季刊』五卷三期、一九七二年)。これにより、生涯の主要な点は、ほぼ明らかになったが、近年、李裕民氏の論考「李成生平与家世考」(『美術研究』二〇〇〇年第四期)が発表され、何氏の説に補訂を加えられている。また、最近出版された古原宏伸氏の『米芾「画史」註解 上』(中央公論美術出版、二〇〇九年)にも、李成に関する事項が多く解説されている。

(3) 李郭系山水画の個別の研究については、考察を進める中で言及する。まず、近年この問題を専門に扱った展覧会図録を挙げておく。「李郭山水画系特展」(国立故宫博物院、一九九九年)。「崇高なる山水—中国・朝鮮、李郭系山水画の系譜—」(大和文華館、二〇〇八年)。

(4) 字は、『書経』堯典「帝曰、咨汝羲暨和、期三百有六旬有六日、以閏月定四時成歲。允釐百工、庶績咸熙」に由来する(『書経』は、『十三經注疏』中華書局用世界書局本影印本によつた。以下、底本については、初出の際に挙げる)。

(5) 彼の墓誌銘は北宋前期の文人・宋白(九三六—一〇二二)によつて撰され、その原文は伝わらないものの、それに基づく記述が北宋後期の郭若虚「図画見聞誌」(一一〇七四年序)、王闢之「澗水燕談錄」(一一〇九五年序)、南宋

中期の王明清『揮塵前録』（一一一六六年識）に節録されている。亡くなつた年次は『凶画見聞誌』に出ており、年齢は『揮塵前録』に記されている。よく知られた資料ではあるが、以下度々言及するので、参照の便を考へ一括して挙げる。

郭若虚『凶画見聞誌』卷三、李成条

李成、字成熙、其先唐宗室、避地管丘、因家焉。祖父皆以儒学、吏事聞於時、至成志尚冲寂、高謝榮進、博涉經史外、尤善画山水寒林、神化精靈、絶人遠甚、叙論卷中已述。開宝中、都下王公貴戚、屢馳書延請、成多不答、学不為人、自娛而已。後游淮陽、以疾終於乾德五年。子覚、尤以経術知名、職踐館閣、請恩幽閑、贈光祿丞事見宋白所撰墓碣。有煙風曉景、風雨四時山水、松柏寒林等凶伝於世。（『西史叢書本』）

王闡之『澠水燕談録』卷七、書画

管丘李成字成熙、磊落不羈、喜酒善琴、好為歌詩、尤妙画山水。周枢密使王朴与之友善、為召至京、將以処士薦之、会朴卒。乾德中、陳守、大司農衛融、以鄉里之旧延之郡齋、日恣飲、竟死於酒。子覚、仕至国子博士、直史館。贈成為光祿寺丞、葬於浚儀之魏陵、宋翰長白為之誌。成画平遠寒林、前人所未嘗為、氣韻瀟灑、煙林清曠、筆勢穎脫、墨法精絶、高妙入神、古今一人、真画家百世師也。雖昔王維、李思訓之徒、亦不可同日而語。其後、燕貴、翟院深、許道寧輩、或僅得一体、語全則遠矣。考白所作成誌、則成未嘗仕、而歐陽文忠公以為成仕至高書郎。按白与成同時人、又与成子覚並列史館、其所紀宜不妄、不知文忠公何以據也、正当以誌為定。（中華書局排印本）

王明清『揮塵前録』卷三

李成、字成熙、系出長安唐之後裔。五代避地、徙家管丘。弱而聰敏、長而高邁、性嗜盃酒、善琴奕、妙画山水、好為歌詩、瑣屑細務、未嘗經意。周世宗時、枢密使王朴与之友善、特器重之、嘗召赴輦下。会朴之亡、因放誕酣飲、慷慨悲歌、遨遊摺紳間。太尉卿衛融守淮陽、遣幣延請、客家于陳、日肆觴詠、病酒而卒、寿四十九。子覚、仕太宗、兩歷国子博士。其後以覚贈至光祿寺丞云。此宋白撰志文大略如此。王著書、徐鉉篆。覚字仲明、列三朝国史、儒学伝、叙其世家又同。覚子宥、仕至諫議大夫、知制誥、有伝、載兩朝史伝、云祖成、五代末、以詩酒遊公卿間、善摹写山水、至得意処、殆非筆墨所成。人欲求者、先為置酒。酒酣落筆、烟雲萬狀、世伝以為宝。歐陽文忠公掃田録乃云、李成仕本朝尚書郎、固已誤

矣。而米元章画史復云、贈銀青光祿大夫、又甚誤也。（『学津討原本』）

(6) ここでは、李覚、李宥の伝のうち、李成と祖先に関する部分を挙げておく。『宋史』卷四三一、李覚伝

李覚、字仲明、本京兆長安人。曾祖鼎、唐国子祭酒、蘇州刺史、唐末、避乱徙家青州益都。鼎生瑜、本州推官。瑜生成、字成熙、性曠蕩、嗜酒、喜吟詩、善琴奕、画山水尤工、人多伝秘其蹟。周枢密使王朴將薦其能、会朴卒、鬱鬱不得志。乾德中、司農卿衛融知陳州、聞其名、召之、成因挈族而往、日以酣飲為事、醉死於客舍「後略」。（中華書局排印本。「」内引用者、以下同）

同書、卷三〇一、李宥伝

李宥、字仲嚴、唐之後裔、自吳徙青、遂為青人。祖成、五代末、以詩酒遊公卿間、善摹写山水、至得意処、疑非筆墨所成。人欲求者、先為置酒、酒酣落筆、烟景万状、世伝以為宝。父覚、見儒林伝「後略」。

(7) 張方平「朝請大夫守太子賓客判南京留守司御史台柱国平涼開国伯食邑九百戶賜紫金魚袋隴西李公墓誌銘并序」（『樂全集』卷三九。以下、本稿では「李公墓誌」と略称する）。全文は、後に触れる際に掲げる。なお張方平「樂全集」は、『四庫全書珍本初集』に収録されるまでは稀覯本のためか、何惠鑑氏の論考は本資料を挙げておられないが、李裕民氏は言及されている。註2前掲「李成生平与家世考」、六一―六三頁。

(8) 註2前掲「何氏「李成略伝」、四〇―四二頁。

(9) 註5前掲。

(10) 五代中原王朝下の各藩鎮の設置と廢止、歴代の節度使に任じられた人名、軍号や領域の変動などを整理したものに、栗原益男『五代宋初 藩鎮年表』（東京堂出版、一九八八年）がある。青州藩鎮についても整理されており、教えられるところが多かった。八六―一〇二頁。

(11) 『旧五代史』卷五九、符習伝。『資治通鑑』卷二七四、天成元年三月、卷二七五、天成元年八月。

(12) 『旧五代史』卷八二、少帝紀一、卷八三、少帝紀三、卷九七、楊光遠伝。『資治通鑑』卷二八三、天福八年二月乙巳朔、卷二八四、開運元年二月丁巳。

(13) 『遼史』卷四、太宗紀下、大同元年正月戊子。『資治通鑑』卷二八六、天福二年正月戊子。

(14) 『旧五代史』卷一〇七、劉銖伝。『資治通鑑』卷二八九、乾祐三年五月庚

成。

(15) 註1前掲、拙稿「(伝) 李成「喬松平遠圖」(澄懷堂美術館)について」、八〜二二頁。

(16) 以下本章の李成の経歴は、註5前掲「澠水燕談録」、『揮麈前録』、註6前掲『宋史』李成伝に基づく。李成の開封上京の時期は、註2前掲、何氏「李成略伝」、四五〜四六頁、李氏「李成生平与家世考」、六一〜六二頁を参照。

(17) 王朴は『旧五代史』卷二二八、『新五代史』卷三二に伝がある。後漢の乾祐三年(九五〇)、状元となった(清・徐松「登科記考」卷二六)。かつて、枢密使・楊邠の食客となっていたが、政争に巻き込まれるのを恐れて帰郷したところ、楊邠は殺害され門弟にも禍がおよび、彼のみ難を逃れたという。当時の出仕が一筋縄ではいかないことをうかがわせる逸話と言えよう。

(18) 王朴の卒年については、『旧五代史』卷二一九、世宗紀、卷二二八、王朴伝、『新五代史』卷二二、周本紀、卷三二、王朴伝、『資治通鑑』卷二九四のいずれも、顯徳六年(九五九)とするが、何氏は『宋会要輯稿』礼四一之二二の顯徳五年とする記述を採用した。一方、李氏は、正史の説の方が編纂の状況等から見てより整合性が高いことを指摘されており、本稿もこれに従う。註2前掲、何氏「李成略伝」、四六〜四七頁、李氏「李成生平与家世考」、六一〜六二頁。

(19) 衛融の伝記は、『宋史』卷四八二の伝及び、『続資治通鑑長編』卷一、建隆元年七月辛亥を参照。なお、李成が陳州へ赴いた時期は、先学の考証に従った。註2前掲、何氏「李成略伝」、五二〜五四頁、李氏「李成生平与家世考」、六一頁。

(20) 本稿では、小川裕充氏の「北宋の絵画」(『世界美術大全集 東洋編五』小学館、一九九八年)に従い、北宋絵画史を次の四期に区分する。前期：太祖・太宗朝(一〇世紀後半)／中期：真宗・仁宗朝(一一世紀前半)／後期：英宗・神宗・哲宗朝(一一世紀後半)／晩期：徽宗・欽宗朝(一二世紀前半)。

(21) 劉道醇『聖朝名画評』卷二、李成条

李成、營丘人。世業儒、為郡名族。成幼屬文、能画山水林木、當時稱為第一。開寶中、孫四皓者延四方之士、知成妙手、不可遽得、以書招之。成曰、吾儒者粗識去就、性愛山水、弄筆自適耳。豈能奔走豪士之門、与工技同处哉。遂不応。孫甚銜之、遣人往營丘、以厚利啖当塗者、卒獲數

図。後成拳進士、來集於春官、孫卑辭堅召、成不得已、往之、見其數図、驚忿而去。章聖每見成筆、必嗟賞之、故声益甚。直史館劉釐者、時推精鑑、於曹武惠王第見成山水図、愛之不已、有詩云、六幅氷綃挂翠庭、危峰疊嶂鬪崢嶸、却因一夜芭蕉雨、疑是巖前瀑布声。識者以為実録。成之為画、精通造化、筆尽意在、掃千里於咫尺、写万趣於指下。峯巒重疊、間露祠野、此為最佳。至於林木稠薄、泉流深淺、如就真景。思清格老、古無其人。景祐中成孫宥為開封尹、命相国寺僧惠明購成之画、倍出金幣、歸者如市、故成之蹟、於今少有。

評曰、成之命筆、惟意所到。宗師造化、自創景物、皆合其妙。耽於山水者、觀成所画、然後知咫尺之間、奪千里之趣、非神而何。故列神品。(画品叢書本)

(22) 『図画見聞誌』卷一、五代、僧德符条

僧德符、善画松柏、氣韻蕭灑、曾於相国寺灌頂院序壁画一松一柏、觀者如市、賢士大夫留題凡百余篇、其為時推重如此。

(23) 『図画見聞誌』卷四、山水門、劉永条

劉永、京師人。工画山水、始師僧德符画松石、後遍求諸家山水、採其所長而做之。及見荆浩之迹、乃知諸家有所未及。一日復睹闕全画、俄歎曰、是乃得名至芸者乎、向所謂登東山而小魯。遂捐棄余字、專法闕氏、果遂升堂、馳名当代矣。有瀑泉屏風、四時山水、山居詩意等図伝於世。

(24) 唐代の松石図については、以前に主題・表現両面の検討を行った。松石図を詠った唐代の題画詩は現在二五例が知られており、題詠が盛んに行なわれたことが分かる。拙稿「唐代の樹石画について―松石図を中心に―(上)(下)」(『古文化研究』五、七号、二〇〇六、二〇〇八年)、上編六三〜六六頁。

(25) 北宋画院の状況については、主に次の文献を参照した。鈴木敬「画学を中心とした徽宗画院の改革と院体山水画様式の成立」(『東洋文化研究所紀要』三八冊、一九六五年)。嶋田英誠「徽宗朝の画学について」(『鈴木敬先生還暦記念 中国絵画史論集』吉川弘文館、一九八一年)。余城「北宋画院之新探」(『文史哲出版社』一九八八年)。

(26) 翰林学士院玉堂の障壁画については、小川裕充氏の専論が詳細を尽くしている。「院中の名画」―董羽・巨然・燕肅から郭熙まで―(『鈴木敬先生還暦記念 中国絵画史論集』吉川弘文館、一九八一年)。

(27) 太宗の書画収集については、『図画見聞誌』卷一、「叙国朝求訪」の記事が

まとまっている。高文進、黄居采が勅命により民間にある書画の搜訪に当たったことも、本条のほか、両者の画家伝（巻三、巻四）に記載される。北宋内府の文物収集については、近年、塚本麿充氏が研究を行っており、特に次の論考に示唆を受けた。「崇高なる山水・郭熙山水の成立とその意義―北宋三館秘閣の文化的機能を中心として―」（註3前掲『崇高なる山水―中国・朝鮮、李郭系山水画の系譜―』）。

(28) 『宋会要輯稿』職官一八之四七

太宗端拱元年五月、詔就崇文院中堂建秘閣。挾三館真本書籍万余卷、及内出古画、墨跡藏其中。凡史館先貯天文、占候、讖緯、方術書五千一百二卷、凶画百四十軸、尽付秘閣。有晋王羲之、猷之、庾亮、蕭子雲、唐太宗、元「玄」、宗、顔真卿、歐陽詢、柳公權、懷素、懷仁墨迹、顧愷之画維摩詰像、韓幹馬、薛稷鶴、戴嵩「嵩」、牛、及近代東丹王李贊華千角鹿、西川黄鷹「筌か」白兔、亦一時之妙也「後略」。〔中華書局影印本〕同様の記事は、程俱『麟台故事』巻一、沿革にも見えるが、末尾付近の「黄鷹」は「黄筌」となっている。西川は蜀地方の意であり、近代の画家として同地方出身の黄筌の画を挙げたと考えてよい。

- (29) 北宋前期の文集である、徐鉉（九一七―九二二）『騎省集』、田錫（九四〇―一〇〇三）『咸平集』、潘閔（？―一〇〇九）『逍遙集』、張詠（九四六―一〇一五）『乖崖集』、柳開（九四七―一〇〇〇）『河東集』、王禹偁（九五四―一〇〇二）『小畜集』、趙湘（九五九―九三三）『南陽集』、魏野（九六〇―一〇一九）『東觀集』、寇準（九六一―一〇二二）『忠愍集』を通過しても、華北山水画の画人、或はその作品に関する記述はほとんど見出せない。わずかに、郭忠恕（『图画見聞誌』巻三）について「五哀詩 故国子博士郭公」（『小畜集』巻四）が、また、宋澥（『图画見聞誌』巻三）について「送宋澥处士之長安」（『小畜集』巻一）、「寄贈長安宋澥逸人十韻」（『東觀集』巻三）が挙げられるくらいである。

(30) 以下、李覚の伝記は、『宋史』巻四三一、儒林伝に載せられる彼の伝および、王称（僞）『東都事略』巻一一三、李覚条に基づく。卒年は『宋史』に淳化四年とされ、『東都事略』に四十六歳とあることから、生年は乾祐元年となる。ここでは、参照の便に後者を挙げておく。

李覚、字仲明、青州益都人也。举九经、起家为将作监丞、通判建州、遷知泗州、転秘書丞。孔維薦覚学行、遷礼記博士。嘗使交州、其酋長謂曰、此土山川之險、中州人乍歴之、豈不倦乎。覚曰、国家提封万里、列郡四

百、地有平易、亦有險固、此一方何足云哉。使還、遷国子博士。太宗幸国子監、顧見講坐、左右言覚方聚徒講書。太宗即令覚对御講、覚曰、陛下六飛在御、臣何敢輒陞高坐。太宗令有司張帘幕、設別坐、詔覚講周易之泰卦。覚因述天地感通君臣相心之旨。太宗甚悦、加直史館、命覚詳校群經及春秋正義、改判国子監、遷司勳員外郎。卒年四十六。覚性彊毅而聰敏、数上書言時事、述養馬漕運屯田三事、甚詳備深、為太宗所喜獎。又嘗效韓愈毛穎伝作竹穎伝、竹穎者謂矢也。（国立中央図書館善本叢刊本）

(31) 宮崎市定「科学史」（平凡社『東洋文庫四七〇』、一九八七年、四六頁）

(32) 以下、宋代の官制については、梅原郁氏の次の文献を参照した。『宋代官僚制度研究』（同朋舎、一九八五年）。「北宋前半の官制」（『福本雅一監修』中国文人伝 第三巻 宋一『藝文書院、二〇〇六年』）。「北宋後半以後の官制」（『福本雅一監修』中国文人伝 第四巻 宋二『藝文書院、二〇〇七年』）。

(33) 『宋会要輯稿』礼一六之三、『統資治通鑑長編』巻二九、端拱元年八月、庚辰にも記述がある。

(34) 『統資治通鑑長編』巻一九、端拱元年一二月の冒頭、巻三〇、同二年四月の冒頭にも記載される。

(35) 宋代の館職については、梅原郁「宋代の館職」（註32前掲、『宋代官僚制度研究』）が詳しい。

(36) 王禹偁「上史館呂相公書」（『小畜集』巻一八）

月日、右正言直史館王某、謹齋戒拜書、有言于相公執事。某累日前以久不修謁、求見相府。相公以某館中諸生、召坐与語。某竊不自料、遂以書日歴為請。相公、因及史氏廢墜、闕人編修、且曰国子博士李覚屢以修撰干時政事。某雖対以梗槩、曾未畢辭退食、傍徨不自寧处何哉。古者守道不如守官。故以弓招虞人、而不進者不見皮冠之故也。某雖不才、忝在史職、至于記簡牘之事。定褒貶之文、不為僭也。李覚位列国庠、当教胄子以詩書礼樂、講誦誨誘而已。又安得授之史筆哉。今館中之士、先進者、有若金部員外郎安德裕、左司諫兼直秘閣宋泌、皆砥礪名節、老于文学。俾之修撰、輿論歸焉。其於後進十數輩、不敢自銜。慮有朋党之刺也。在相公熟參之。相公且曰、史筆之難有三焉。才也、学也、識也。相公豈以館閣諸生才学識見、皆不及覚邪。則捨此而取彼可矣。若猶未也、相公又何如哉。况朝行混雜也久矣。唯三館兩制非文士不居。一旦又輕之蓋埽地矣。必也相公尽至公、塞浮議、莫若徧召直館与覚聚、而庭試以考之。則是非較然矣。若因而授之、取笑千古之下。則某恥之。相公亦恥之。矧相

公監修国史得不留意乎。干犯廊廟、躬俟譴責。某惶懼頓首。(四部叢刊本)

(37) 『宋史』卷四三二、李覺伝に、経過が略述されている。

〔前略〕是「端拱元年」冬、以本官直史館。右正言王禹偁上言、覺但能通經、不当輒居史職。覺傲韓愈毛穎伝作竹穎伝以獻、太宗嘉之、故寢禹偁之奏〔後略〕。

梅原氏の研究によれば、直史館任命者は太宗朝末期から増加していくとのことであり、その登用には特別試験が課せられるのが通例であった。氏は、その例として王禹偁が、作詩の試験を受けて任用されたことを挙げられる。このことから、李覺の抜擢が例外的であったことが窺える。註35前掲、『宋代の館職』、三三六―三三七頁。

(38) 『東都事略』卷一三三、李覺条

〔前略〕嘗效韓愈毛穎伝、作竹穎伝、竹穎者謂欠也〔後略〕。

(39) 『渾水燕談録』李成条

〔前略〕子覺、仕至国子博士、直史館。贈成爲光祿寺丞、葬於浚儀之魏陵、宋翰長白爲之誌〔後略〕。

なお、同じく北宋に魏陵に埋葬された例として、蔡襄(一〇二二―六七)に「右千牛衛大將軍致仕陳〔穎文〕公墓誌銘」〔莆陽居士蔡公文集〕卷三四)があり、「其年十二月丙辰、葬於開封府祥符縣魏陵鄉」とする。浚儀県は大中祥符二年(一〇〇九)に祥符県に改められた。『統資治通鑑長編』卷七一、大中祥符二年正月乙丑。

(40) 註5前掲。

(41) 例えば、後晋に青州で起こった先述の楊光遠の反乱時の逸話も載せられている。龍城戦の際の食糧不足を伝えるものであり、参考までに挙げておく。

『渾水燕談録』卷九、雜録

楊光遠之叛青州也、有孫中舍忘其名。居圍城中、族人在州西別墅。城閉既久、内外隔絶、食且尽、拳家愁嘆。有畜犬徬徨其側、若有憂思、中舍因囑曰、爾能爲我至莊取米邪。犬搖尾応之。至夜、爲置一布囊、并簡繫犬背上。犬即由水竇出、至莊、鳴吠。居者開門、識其犬、取簡視之、令負米還、投曉入城。如此數月、此至城開、孫氏圍門數十口独得不餓。孫氏愈愛畜之。後數年斃、葬於別墅之南。至其孫彭年、語龍圖趙公師民、刻石表其墓、曰靈犬誌。

(42) 宋白は、建隆二年(九六一)の進士で、『文苑英華』の編纂に携わった。

伝は『宋史』卷四三九。王著は、初め後蜀、後に宋に仕えた書家で、伝は『宋史』卷二九六。徐鉉は、南唐から帰朝した文人で、篆書に詳しく太宗の命を受けて『説文解字』の校定を行った。伝は『宋史』卷四四一。なお、王著は『淳化閣帖』の編者として著名だが、その点については、疑問も呈されている。福本雅一「『淳化閣帖』の成立」、『淳化閣帖』第一卷、二玄社、一九八〇年。同氏「石刻と法帖」、『藝文書院』、二〇〇九年に再録)。

(43) 『東都事略』は「司勳員外郎」とするが、『宋史』の伝および「李公墓誌」とも「司門員外郎」とするのに従う。

(44) 註52前掲の「李公墓誌」においても「李覺」不及中寿、故其用不究」と記されている。

(45) 註21前掲。

(46) 燕文貴、高克明の経歴については、次の論文を参照した。嶋田英誠「燕文貴の伝称作品と、その北宋山水画上に占める位置についての一試論」、『美術史』一〇一号、一九七六年。曾布川寛「五代北宋初期山水画の一考察」、『荆浩・関仝・郭忠恕・燕文貴』、『東方学報』京都「四九冊、一九七七年。同氏「中国美術の図像と様式」、『中央公論美術出版』、二〇〇六年に再録)。嶋田英誠「高克明と高克明派」、『跡見学園女子大学紀要』一八号、一九八五年)。

(47) 曹彬の伝は、『宋史』卷二五八。

(48) 劉鼇は、夏竦「故保平軍節度使同中書門下平章事駙馬都尉贈中書令魏〔咸信〕公墓誌銘」、『文莊集』卷二九)に、「洎乾德五年〔九六七〕五月、太宗至仁心道神功聖德文武睿烈大明広孝皇帝方尹京邑、遣判官劉鼇至第、語宣懿以昭憲雅意、翌日召公於南宮、延見誨諭」(四庫全書本)とあるのと同一人物の可能性もあるが確定し難い。

(49) 『次統翰林志』の末尾には、「時聖上幸毫之歲、孟春月書」の年紀があり、これが真宗の毫に行幸した大中祥符七年に当たることが、小川裕充氏によって考証されている。註26前掲「院中の名画」、関係年表注九。

(50) 『次統翰林志』(洪遵「翰苑群書」下)

〔前略〕公「蘇易簡」乃於玉堂後廡建二書閣、東西交映藻繪間飾。自是文籍有附焉。閣之上下、悉命僧巨然画煙嵐曉景以布之。筆跡野逸、效李成之作、而又自成一家之妙。(知不足齋叢書本)

(51) 小川裕充氏は、巨然が李成に影響を受けた要素として大気表現以外にも、山水画面制作における連想能力の扱い方にも学ぶところがあつたことを指摘



されている。註26前掲「院中の名画」、四九、五四頁。

(52) 張方平「朝請大夫守太子賓客判南京留守司御史台柱國平涼原開國伯食邑九百戶賜紫金魚袋隴西李公墓誌銘并序」(『樂全集』卷三九)

仁宗朝、近臣、以清德純行者稱者、有太子賓客、隴西李公宥、字仲巖。其為人雖長者、然安重有守、儒雅而文、故識者品藻之、以為彬彬君子者矣。支出于唐、五世祖鼎、蘇州刺史、因家吳、後徙營丘。曾祖瑜、應藩侯辟、從事平盧軍。祖成、贈太子洗馬、不仕亂世、放懷詩酒、与逸民游。酷嗜山水、能因其幽深之趣、撰之尺素、極無涯之遠。天下之名筆、莫得其髣髴、故世以為神妙。考覈、以明經為博士。太宗嘗幸國子學、適值其為諸生講易、即命坐之、講否泰二卦、言上下交、則其志通、君子小人、各從其類、消長吉凶之象。太宗甚悅、翼日以語輔臣曰、聞李某之說、是可以為君臣鑑矣。稍見褒擢、終司門員外郎、直史館。不及中壽、故其用不究。公躋顯仕、累贈禮部尚書。妣王氏、封太原郡太君。公六歲而孤、知好學問、幼不嬉弄、長不雜交、其度澹如也。祥符中舉進士、一上中等、調火山軍判官。時章聖以文治、欲離校秘書延閣之書、詔吏部、先以身言書判擇三銓之集者百餘員送西掖。覆以三題、纔三人中選、公處其一。擢充館閣校勘、預撰真宗御集、詳定雅樂。凡論議之選、多以屬公。禮部辟試進士、故宋丞相文卷已為考落。公閱得之、袖以見主司中山劉侍郎筠。中山歎賞、取冠天下士。再典太學考試、皆首送楊寘、寘竟廷試第一。後使荆湖、見某州某官唐介、深加器獎、厚為薦寵、今著名台閣。故時推公精鑑。歷令刺守、視民如傷、聽訟斷獄、尤為明慎。斬春值歲凶、道殣相望、老稚病羸、委諸塗者、公鑄圭田食之、多以全活。民或殺人、而以利給愚備、吏通為奸、使自誣伏。臬上具獄、公一訊情得、聞者以為神明。其察京獄、囚有疑罪、法不當死、尹按誅之過。公慮問、即糾以聞、尹坐免。在金陵、民有誣人以殺其子者曰、吾子去家時、衣若衣、巾若巾、今巾是矣。民苦榜楚、自誣伏曰、我固殺之。臬上具獄、公疑、親究、卒得枉狀。由其深誠為質、致以慘怛之心、故若有以感發者然。呂文靖公當國、厭時俊奔競、知公守道、欲以激雅俗、白公修起居注、尋知制誥。公齒長矣、不樂諸輩新進事辭翰、甫閱歲、請解職易州。朝廷從其志、除諫議大夫、而惜其去、留判尚書禮部太常寺。復請金陵、加集賢院學士以行。政簡易、吏民便愛。久之、府廨火、自微廬揚譙門以及寢序。公將吏卒護庫兵、帑積以全。仁皇始封昇王、因建州号江寧。聞火意不悅、遣使往視。公不時救、遂以秘書監致仕。而善人惜之、問或為言、謂譴之重、公亦不

自介。上以其終長者、改分司南京、復領留守司御史台、遂遷太子賓客。睢陽積年、安時而処順、浩然得於和理、憂樂無自入矣。某年月日捐館、享年六十有二。歷官繇選調遷大理寺丞、殿中丞、太常博士、祠部度支司封員外郎、祠部刑部郎中、至諫議大夫。兼職繇校勘改集賢校理、直集賢院、記注、典贊命、至集賢學士。其更任使繇太常禮院、吏部南曹、登聞鼓院、檢院、知開封府、出守蘄州、提点荆湖北路刑獄、利州路轉運使、三司戶部判官、戶部勾院、糾察在京刑獄。徊翔館閣、踐更內外、垂三十年、而資不苟合、恬於勢利、不為名高、亦不汨於俗、詭僻之為不接于心、行安而節和、故士論無間然者。既幼失其親、痛不迨養、事寡姑如事母。嘗遷兵部郎中、不拜、以丐封邑。別業在陳、哀舅家之窶、拳質劑界之。与朋友交、久而弥篤。不治生產、至不祿、家屢空索然。朝廷聞之、特加贈賜、以給喪事。公初娶張氏、禮部侍郎秉之女、封南陽原君。後配刁氏、刑部郎中湛之女、封延安郡君。一子忱、大理寺丞、恂、大理評事。一女、適刑部郎中知制誥吳充。某年月日、葬公于某所。某与公同時左右吏直外制。实有忘年之契、故忱來請銘。

銘曰、有君子儒、恂恂李公。惟資篤行、時乎中庸。適道之正、不吝不同。循理之順、匪執匪容。歷令刺守、政處其厚。民罔常懷、謂公父母。其在朝廷、於得無苟。歲寒後凋、如松之茂。退老于睢、無田一廛。自得其得、動而之天。以是仁心、以是吉德。以還本真、以貽淳則。(四庫全書本)

(53) 「李公墓誌」に「某与公同時左右吏直外制。实有忘年之契」とあり、両者が外制つまり知制誥だったことは、『統資治通鑑長編』卷一四六、慶曆四年正月辛卯に見える。

「前略」賜「中略」知制誥李宥、張方平「中略」器略有差。(中華書局排印本)

(54) 以下、李宥の伝記は、「李公墓誌」および「宋史」卷三〇一、李宥伝に基づく。生卒年は墓誌において、父・李覺が亡くなったとき六歳であったとされることと、享年が六二歳であったことから算出できる。科挙合格の年次は「宋史」李覺伝に記されるのに従う。

(55) 「因画見聞誌」卷六、近事、丁晋公

丁晋公家藏書画甚盛。南遷之日、籍其財產、有李成山水寒林共九十餘軸、他皆稱是。後悉分掌内府矣。

丁謂については、同書の序文でも書画の収蔵が豊富だったことを言う。また、真宗が丁謂に筆者不明の「臥雪図」を贈ったこともあった。同書、卷

六、近事、臥雪図。

(56) 『宋会要輯稿』選萃一九之八

〔天聖〕二年正月二十一日〔中略〕、又請差校理、陸軫、聶冠卿、李宥〔中略〕、充点検試卷官〔後略〕。

(57) 燕肅は、『宋史』卷二九八に伝がある。卒年は、『図画見聞誌』卷三、燕肅

条に「康定元年」とあり、『東都事略』卷六〇、燕肅条に「卒年八十」とあることから生年も分かる。その活動については、主に科学技術史の分野から研究がなされている。張蔭麟「燕肅著作事蹟考」(『張蔭麟文集』中華叢書、一九五六年)。王錦光「宋代化学家燕肅」(『杭州大学学报』一九七九年第三期)。王振鐸「燕肅指南車造法補正」(『文物』一九八四年第六期)。

張柏春「燕肅」(『中国古代科学家伝記』上集、科学出版社、一九九二年)。徐寿亭、袁炳亮「多才多藝的北宋科学家—燕肅」(『文史知識』一九九三年第一期)。白欣他「官員科学家燕肅」(『西南交通大学報』(社会科学版)二〇〇五年六卷六期)。

(58) 『図画見聞誌』燕肅条は、「尤も山水寒林を画くを善くし〔中略〕、摩詰〔王维〕の退蹤を踏み、咸熙〔李成〕の懿範を追う」とその画系を述べ、さらに「太常寺に画く所の屏風有り。玉堂、刑部、景靈坊の居第、許洛の佛寺中とともに、皆画壁有り」とする。彼が太常寺に「寒林図屏風」を描いたことは、北宋・宋敏求「春明退朝録」卷上に見える。刑部の「山水図壁画」については、王珪(一〇一九〜八五)「依韻和景彝刑部序燕侍郎画山水二首」(『華陽集』卷二)がある。玉堂の「山水図屏風」については、註26前掲、小川氏「院中の名画」を参照。

(59) 許道寧については、曾布川寛氏の論考が詳しい。「許道寧の伝記と山水様式に関する一考察」(『東方学報』京都』五二冊、一九八〇年、註46前掲)中国美術の図像と様式」に再録)。

(60) 北宋中、後期の劉敞らがこの壁画に詩を寄せている。後章で取り上げる。

(61) 『聖朝名画評』卷一、翟院深条。

(62) 『図画見聞誌』卷四、李宗成条および郭熙条。

(63) 『聖朝名画評』卷一、翟院深条。『図画見聞誌』卷四、翟院深条。

(64) 註21前掲。

(65) 註2前掲、李氏「李成生平与家世考」、六三頁に考証がある。

(66) 孟元老「東京夢華録」卷三、相国寺内万姓交易

相国寺、毎月五次開放万姓交易〔中略〕、資聖門前、皆書籍、玩好、図画、及諸路罷任官員土物、香菓之類〔後略〕。(『静嘉堂文庫所蔵元刊本』)

(67) 『聖朝名画評』卷一、翟院深条

〔前略〕後成孫宥、為開封尹日、購其祖画、多誤售院深之筆、以其風韻相近、不能弁爾。

(68) 米芾「画史」

山水李成只見二本、一松石、一山水〔中略〕。今世貴侯所收大図、猶如顏柳書葉鋪牌、形貌似爾、無甚自然、皆凡俗。林木怒張、松幹枯瘦多節、小木如柴無生意〔中略〕。使其是凡工、衣食所仰、亦不如是之多、皆俗手假名、余欲為無李論。(『画品叢書本』)

(69) 李宥の退隱先については、「李公墓誌」および蘇轍が張方平に代わって三〇年後に撰した祭文「代張公安道祭李宥侍郎文」(『欒城集』卷二六)では、睢陽(河南省)とする。なお、何氏は、後者を引用するものの、この部分については「淮陽」とし、李成の没後も淮陽(陳州)に住んだと考えておられるが(註2前掲、「李成略伝」、五五頁)、誤引の可能性を指摘しておく。ただし、「李公墓誌」によれば「陳」にも別業を持っていたということであり、李成以来の地縁があった可能性はなお考えられる。

(70) 註52前掲。

(71) 何氏は、李成に光祿寺丞が贈られたことを、当時の画院待詔の規定に基づくものと解釈されたが、李氏は、李宥の出世によって、さらに太子洗馬が追贈されたと解釈されている。父以上に出世を果たしたことで、祖父にも一上等の贈官がなされたと考えざるべきであろう。註2前掲、何氏「李成略伝」、五四〜五五頁、李氏「李成生平与家世考」、六二頁。

(72) 『論語』泰伯

子曰、篤信好学、守死善道。危邦不入、乱邦不居。天下有道則見、無道則隱。邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。(十三經注疏本)

『孟子』尽心上

(73) 『聖朝名画評』の成立は、同じく劉道醇の著である『五代名画補遺』の陳

洵直序が、嘉祐四年の紀年をもち、「其門品上下、一如聖朝名画評之例類、仍附之於後者」と記すことから、これよりも前と分かる。また本書の卷一、侯翌条に「至和中」とあることから、先述は次の嘉祐年間、特にその初め

頃と考えられている。註59前掲、曾布川氏「許道寧の伝記と山水様式に関する一考察」、注四。註26前掲、小川氏「院中の名画」、関係年表注一三。なお、本書卷一、勾龍爽条には「神宗時爲図画院祇候」とあり、これを根拠に最終的な成書年代を哲宗朝まで引き上げる意見があるが（謝巍「中国画学著作考録」上海书画出版社、一三二—一三三頁）、本書を参考文献に挙げる「図画見聞誌」（卷一「叙諸家文字」）は、卷三、勾龍爽条で「国初爲翰林待詔」としていることから、「神宗」の表記は後世の改入と見られる。これ以上の詳論は避けるが、本書の成立は従来どおり嘉祐年間と考えて論を進める。

(74) 孫四皓は、『聖朝名画評』の高益や王士元の条にも見え、太祖の頃から画家たちの支援者であったことが記されているが、何氏はその名が俗称であり、宋初に開封で酒樓を開いて富を築き、その娘が太宗の貴妃となった孫守彬に当たることを論証された。娘が入内したのは、『宋会要輯稿』后妃三之一の記述などによれば、太平興国二年（九七七）で、孫氏が李成を招いたとする開宝年間（九六八—七六）には、まだ娘は宮中に入っており、逆に孫氏が外戚になってからのこととすれば、さらに時期が隔たってしまうという。註2前掲「李成略伝」、四七—五二頁。何氏はそれ以上考証を加えておられないけれども、李成が九経に挙げられた太平興国五年とは、時期が近接していることから、彼の科挙受験の経歴が、李成が科挙を受けたとする本逸話に影響を与えている可能性はある。

(75) 歐陽脩「帰田録」卷二  
近時名画、李成、巨然山水、包鼎虎、趙昌花果。成官至尚書郎。其山水寒林、往往人家有之。巨然之筆、惟学士院玉堂北壁独存、人間不復見也  
「後略」。（中華書局排印本）

(76) 註5前掲。  
(77) 慶曆三—四年頃、ともに知制誥を務めていたことが知られる。

『統資治通鑑長編』卷一四五、慶曆三年十二月辛丑  
「前略」太常丞、集賢校理、同修起居注、知諫院歐陽修爲右正言、知制誥「後略」。

同書、卷一四六、慶曆四年正月辛卯

「前略」賜「中略」知制誥李宥「中略」、器敝有差。

同書、卷一四九、慶曆四年五月丁丑

知制誥歐陽修言「後略」。

(78) 註5前掲。

(79) 「宣和画譜」の李成条については、次章で取り上げる。

(80) 「観邵不疑学士所藏名書古画」（「宛陵先生集」卷四七）

野性好書画、無力能自致。每遇高趣人、常許出以視。邵侯多奇玩、留我特開筵。首観阮与杜、驢上瞑目醉阮籍、杜甫。韓幹貌四馬、臨流解鞍轡。花驄照夜白、正側各畜意。繁衣穿袴靴、坐立皆既史。精神宛如生、于顯復穿鼻。梅雞徐熙花、竹間寒雀睡。逸少自写真、对鏡絕相類。数本失姓名、古胡并老驥。山水樹石硬、荆関芸能至荆浩、闕鑑「全」。巨然李成者、落筆愈奇異。人物張僧繇、雖伝恐非是。其余又莫究、模搭似未備。周秦已來書、行草楷篆隸。声名旧烜赫、一一果可喜。邵侯愛我曹、咸使紙尾記。况侯有古学、小字刻珉翠。各贈墨本帰、懷宝誰肯忘。（四部叢刊本）

(81) 「観楊之美画」（「宛陵先生集」卷一五）

天官乘車建朱旗、赤旛前亞風卷披。二龍緩駕蒼髯垂、印箱傍挈文籍隨。双驂推輓如畏運、行從冠服多威儀。水官自有真龍騎、兩佐並跨鯨尾螭。步趨群吏怪眼眉、雲生海面無端倪。雷部処上相与期、人身獸爪負鼓馳。後有同類挟且搥、次執電鏡風囊吹。青蛇有角魚足鬣、上下引導神所施。地官既失不可知、此画伝是閻令爲。設色鮮潤筆法奇、綉理膩滑雞子皮。吳生龍王多裂隙、八軸展玩忘晨炊。李成山水眺景移、黄荃「筌」花竹雀擁枝。韓幹馬本摸搭時、神駿多失存毫釐。日高腹枵眼皆眵、邂逅獲見何言疲。厚謝王翁意不衰、他日飽日看無遺。

なお、梅堯臣には、王洙（九九七—一〇五七）所藏の「山水図」を詠んだ「王原叔内翰宅観山水図」（「宛陵先生集」卷五〇）があり、ここにも李成についての批評がみられる。

石蒼蒼、連峭峰、大山嵯峨雲霧中。老松瘦樹無筆蹤、巧奪造化何能窮。古絹脆裂再粘統、氣象一似高高嵩。上有荆浩字、特帰翰林公。願換廷圭一丸墨、誰言完錢須青銅。范寛到老学未足、李成但得平遠工。黄金白壁未爲宝、文人師臣無不通。

「范寛は老に到るも学未だ足りず、李成は但だ得たり平遠の工」と、批判的な言い回しだが、これは、この「山水図」が両者の先輩の荆浩の落款を有する古画で、それを賞讃する必要からである。むしろ、李成の得意としたのが、平遠山水であるという認識を示していることが注意される。

(82) 「二十四日江鄰幾邀観三館書画録其所見」（「宛陵先生集」卷一八）

五月秘府始暴書、一日江君来約予。世間難有古画筆、可往共観臨石渠。

我時跨馬冒熱去、開厨覓匣鳴鑰魚。義猷墨迹十一卷、水玉作軸光疏疏。

最奇小楷樂毅論、永和題尾付官奴。又看四本絕品畫、戴嵩吳牛望青蕪。

李成寒林樹半枯、黃荃「筌」工妙白兔圖。不知名姓貌人物、二公對奕旁觀俱。黃金錯鏤為投壺、粉障復画一病夫。後有女子執巾裾、牀前紅毯半圍爐。牀上二妹展氍毹、繞牀屏風山有無。画中見画三重鋪、此幅巧甚意思殊。孰真孰假丹青模、世事若此還可吁。

本詩は、王安石の詩に南宋の李壁が註をつけた『王荊文公詩』卷二十一にも収録されているが、同じく王安石の文集である『臨川文集』には収められていない。この二書における古詩の配列はほぼ同一であるが、『王荊文公詩』の古詩の最終部分にあたる卷二十一は、『臨川文集』にはない。またこの巻には、本詩以外にも他の詩人の作とみられるものが複数ある。内容も、本稿で引いた梅堯臣の書画を批評する詩に似ることから、梅堯臣の作と考える。

(83) 註28前掲。

(84) 註75前掲。

(85) 仁宗、英宗朝の最も有力な政治家・韓琦(一〇〇八―七五)は、相州(河南省安陽)で造営した園池に休逸台という台を設け、しばしば詩を詠んでいる。このうち、「雪齋登休逸台」(『安陽集』卷一三)では、雪で清らかさを増した西山の景色を描かせたいが、さて李成ほどの巧みな画家がいるだろうかと述べる。

休逸台頭雪乍晴、病眸雖洪亦增明。幾年無此三農樂、万物皆隨一氣清。脩竹拒寒森晚節、垂楊偷潤裊春情。當軒欲繪西山景、巧筆何人似李成。

(正徳九年刊本)

(86) 『林泉高致』画記の冒頭から関係部分までを挙げる。

思家有先子手誌載。神宗即位後庚「戊の誤り」申年二月九日、富「弼」相判河陽。奉中旨、津遣上京。首蒙三司使吳公中復召、作省壁。統於開封尹邵公允召、作府庁六幅雪屏。次於都水、為判監張公堅父故人延某、画六幅松石屏。次吳正憲「充」為三「司」塩鉄副使、召作庁壁風雪遠景屏。又於諫院、為正憲作六幅風雨水石屏「後略」。(四庫全書本)

「画記」とその中に現れる人物・建築の情報については、次の諸論考に考証があり教示を受けた。薄松年、陳少豊「讀『林泉高致・画記』札記」(『美術研究(中央美術学院学報)』一九七九年三期)。鈴木敬「『林泉高致集』の「画記」と郭熙について」(『美術史』一〇九号、一九八〇年)。鈴木敬

『中国絵画史 上』(吉川弘文館、一九八一年)、二二五―二三五頁。

(87) 『林泉高致』画格拾遺、一望松

先子以二尺余小絹、作一老人倚松岩前、在一大松下。自此后作無數松。大小相連、軀嶺下澗、幾千百松、一望不斷、平昔未嘗如此布置。此物為文潞公「彦博」壽、意取公之子孫孫聯綿公相之義、潞公大喜。(画論叢刊本)

(88) 『図画見聞誌』卷四、許道寧条

「前略」張文懿「十遜」贈詩曰、李成謝世范寬死、唯有長安許道寧「後略」。

(89) 劉敞「題度支行李許道寧画松石呈彦猷鄰幾直孺」(『公是集』卷五)

長松森無依、蒼石儼相對。自然山林氣、若出天壤外。許生筆妙絕、今世殊少輩。發揮得意表、瀟灑與神會。炎熱五月交、塵土九衢內。微風度牕來、左右含天籟。下有漁樵翁、生事尤可愛。茅茨乍隱見、吠畝更向背。吾廬若芥此、軒冕本不賴。願從二三子、相與駕言邁。(四庫全書本)

劉敞は『宋史』卷三一九に伝がある。詩の制作された時期についての考証は、註59前掲、曾布川氏「許道寧の伝記と山水様式に関する一考察」、四五頁に從う。

(90) 結句の「相与駕言邁」は、「古詩十九首」(『文選』卷二九)の第一一首の冒頭の句「廻車駕言邁」を踏まえる。

(91) 拙稿「唐代の樹石画について―松石図を中心に―(上)(下)」(『古文化研究』五、七号、二〇〇六、二〇〇八年)、上編七六―七七頁。

(92) 梅堯臣「依韻和原甫「劉敞の字」省中松石画壁富彦国「弼」為省判日令許道寧画」(『宛陵先生集』卷一八)

山林与城闕、事物不相對。唯聞秉道義、所処無内外。趨煩而毀靜、此理乃俗輩。昔有天下賢、喜得名筆會。買粉塗南牆、松石生屋內。石怪如春濤、松偃如起籟。画來二十年、數偶未輒愛。罕親憑按顔、但睹抱懷背。雖当省闈蔽、晦昧欲何賴。今逢茂陵人、独唱亦豪邁。

(93) 韓維「奉同原甫度支行李許道寧画松依韻」(『南陽集』卷四)

長松盤青冥、鬱与窓戶對。許翁写生意、独得毫墨外。年侵日昏剥、扞拭自君輩。得非神物守、以待真賞會。儵然簿書暇、恍若巖壑內。举手捫紫烟、側耳聽清籟。蒼林与老石、野性旧所愛。一從官都邑、茲遊頗乖背。慰此寤寐懷、典刑亦足賴。幸当掃塵壁、促駕我其邁。(四庫全書本)

なお、同省には許道寧筆の山水壁画もあり、これにも劉敞がまず詩を詠み

二人が和韻した。劉敞の詩は現在の文集には未収だが、二人の詩は伝わっているので参考に挙げる。韓維の詩は、平遠について言及しており、許道寧の壁画が松石と平遠山水とで構成されていたことが分かる。

梅堯臣「依韻和原甫汀壁許道寧山水云是富彦国作判官時画」〔宛陵先生集〕卷十八

山情水思半軒間、試問來居有底間。唯有才高方暇佚、無論歲月自能攀。韓維「省壁画山水亦道寧富公為判官時令画」〔南陽集〕卷一三

淡水疎峰拳日間、獨憐平遠思多間。煩君莫使埃塵汚、絕筆如今不易攀。

(94)「林泉高致」山水訓

君子之所以愛夫山水者、其旨安在。丘園養素、所常處也。泉石嘯傲、所常樂也。漁樵隱逸、所常適也。猿鶴飛鳴、所常觀也。塵囂韁鎖、此人情所常厭也。烟霞仙聖、此人情所常願而不得見也。直以太平盛日、君親之心兩隆、苟潔一身、出處節義斯係。豈仁人高蹈遠引、為離世絕俗之行、而必與箕穎埒素、黃綺同芳哉。白駒之詩、紫芝之詠、皆不得已而長往者也。然則林泉之志、烟霞之侶、夢寐在焉、耳目斷絕。今得妙手、鬱然出之、不下堂筵、坐窮泉壑、猿声鳥啼、依約在耳、山光水色、滉漾奪目。此豈不快人意、實獲我心哉。此世之所以貴夫画山水之本意也。不此之主、而輕心臨之。豈不蕪雜神觀、溷濁清風也哉。〔画論叢刊本〕

(95)黃庭堅「跋郭熙画山水」〔山谷題跋〕卷八

郭熙元豐末為顯聖寺悟道者作十二幅大屏。高二丈余、山重水複、不以雲物映帶、筆意不乏。余嘗招子瞻兄弟共觀之。子山「蘇轍」歎息終日、以為郭熙因為蘇才翁「舜元」家摹六幅李成驟雨、從此筆墨大進。觀此画乃是老年所作可貴也。元符三年九月丁亥、觀於青神蘇漢侯所。〔津逮秘書本〕

(96)註「前掲、拙稿」〔伝〕李成「喬松平遠图」〔澄懷堂美術館〕について、二一、一七頁。

(97)「宋史」卷二二一、宰輔表二、熙寧二年、卷三二三、富弼伝。

(98)「宋史」卷二二一、宰輔表二、治平二年、熙寧六年、卷三二三、文彦博伝。

(99)「宋史」卷三二五、韓維伝。

(100)「宋史」卷三二七、邵亢伝。

(101)「宋史」卷二二一、宰輔表二、熙寧九、元豐三年、卷三二二、吳充伝。な

お彼が、梅堯臣と親しく交際し、文物の収蔵家・鑑賞家でもあったことは、「吳冲卿出古飲鼎」、「依韻吳冲卿秘閣觀逸少墨蹟」〔宛陵先生集〕卷一八

に見える。

(102)「李公墓誌」に、「一女、適刑部郎中知制誥吳充」とある。この李宥の娘の伝記については、李氏の論考が詳しい。註2前掲、「李成生平与家世考」、六三頁。

(103)米芾「画史」

余家所收李成、至李冠卿大扇、愛之不已、為天下之冠。既購得之、背於真州。昭宣使宋用臣、自舒州召還見之、太息云、慈聖光獻太后、於上温清小次尺購李成画、貼成屏風。以上所好、至輒玩之。因吳丞相冲卿夫人入朝、太皇使引弁真偽。成之孫女也。内以四幅為真、拆奉上。別購補之。敕宋用臣背於内東門。正与此類。因語泫然。囑吾愛惜、余亦甚珍之。

この一条については、古原宏伸氏の訳註を参照した。註2前掲、「米芾」画史」註解 上、一三六、一四六頁。

(104)宋用臣は、「宋史」卷四六七に伝がある。元祐年間に舒州などへ左遷されたが、哲宗の紹聖初年に内侍省押班となった。文中の「自舒州召還」はこれをさす。

(105)「宋史」卷二四二、慈聖光獻曹皇后伝

「前略」神宗立、尊為太皇太后、名宮曰慶壽。帝致極誠孝、所以承迎娛悅、無所不尽、從行登翫、每先後策掖。后亦慈愛天至、或退朝稍晚、必自至屏展候囑、問親持饌飲以食帝「後略」。

(106)郭熙が、通常の画院画家とは異なり、御書院に属して作画を行ったことは、次の論文に考証がある。小川裕充「唐宋山水画史におけるイメージネーション」〔上〕〔国華〕一〇三四号、一九八〇年、注一一。

(107)いづれも、「林泉高致」画記に記述される。

(108)「林泉高致」山水訓

大山堂堂、為衆山之主。所以分布、以次岡阜林壑、為遠近大小之宗主也。其象若大君赫然当陽、而百辟奔走朝会、無偃蹇背却之勢也。

(109)曾布川寛氏は、郭熙の山水画の性格を、士大夫の趣向に沿った平遠山水と、「早春图」に見られるような、皇帝や公の場により相応しい「官画」としての大観的な山水表現の両面から分析されている。「郭熙と早春图」〔東洋史研究〕三五卷四号、一九七七年。註46前掲、「中国美術の図像と様式」に再録)。なお、郭熙の平遠山水画風を中心に論じた研究に、Ping Foong, Guo Xi's Intimate Landscapes and the Case of Old Trees, Level Distance,

Metropolitan Museum Journal, vol.35, 2000. がある。

(110) 葉夢得『石林燕語』卷一

官制行、内両省諸庁照壁、白僕射而下、皆郭熙画樹石「後略」。(中華書局排印本)

同書、卷四

元豐既新官制、建尚書省於外、而中書、門下省、樞密、學士院、設於禁中、規模極雄麗。其照壁屏下、悉用重布、不糊紙「中略」。兩省及後省、樞密、學士院、皆郭熙一手画、中間甚有傑然可觀者。而學士院画春江曉景為尤工「後略」。

(111) 『林泉高致』画記

玉堂屏風。神宗既新尚書省、樞密院、又鼎新禁中諸天宇。如玉堂成、特遣中貴張士良、佖聖旨、以為翰苑摘藻之地、卿有子讀書、宜与着意画。先子齋嘿數日、一揮而成。其景春山也。春情之融冶、物態之欣予、觀者怡然、如在四明天姥之境。蘇子瞻「賦」詩所謂、玉堂昼掩春日間、中有郭公画春山。鳴鳩乳燕初睡起、白波青嶂非人間。蓋揅実言情、撮其大要。また、前註引用の『石林燕語』卷四の記事を参照。玉堂の建造年代は註86前掲、鈴木氏『林泉高致集』の「画記」と郭熙について、六頁による。

なお、「画記」の制作に関する記述は、本屏風が最後であり、哲宗朝での作画記録は他の資料でも知られないことから、郭熙が宮中に奉職したのは神宗朝までと考えられている。註86前掲、鈴木氏『中国絵画史』上、二四三～二四四頁。

(112) 『図画見聞誌』卷一、「論三家山水」および巻四の劉永条、紀真条。

(113) 王誥「煙江疊嶂図巻」については、先に考察の機会をもった。拙稿「王誥「煙江疊嶂図」について—上海博物館所蔵・着色本、水墨本を中心に—」

「澄懷」一五号、澄懷堂美術館、二〇〇二年。

(114) 西園雅集の故事については、次の諸論考を参照。福本雅一「西園雅集図をめぐって(上)(下)」、『学叢』一一、一三三号、一九九〇、一九九一年。同氏『中国技藝論集』藝文書院、二〇〇九年に再録。近藤一成「西園雅集考—宋代文人伝説の誕生—」、『史観』二二九冊、一九九八年、「西園雅集考—宋代文人伝説の誕生(続)—」、『史観』一四二冊、一九九九年、同氏「宋代中国科学社会の研究」(汲古書院、二〇〇九年)に再録。板倉聖哲「馬遠「西園雅集図巻」(ネルソン・アトキンス美術館)の史的位位置—虚構としての「西園雅集」とその絵画化をめぐって—」、『美術史論叢』一六号、一九九九年。

(115) 韓拙『山水純全集』論觀画別識

「前略」世有王晋卿者、戚里之雅士也「中略」。偶一日於賜書堂、東掛李成、西掛范寬。先觀李公之跡云、李公家法、墨潤而筆精、煙嵐輕動、如对面千里、秀氣可掬。次觀范寬之作、如面前真列峰巒、渾厚氣壯雄逸、筆力老健。此二画之跡、真一文一武也。余嘗思其言之当、真可謂鑑通骨髓矣「後略」。(画論叢刊本)

(116) 米芾『画史』

礼部侍郎燕穆之、司封郎宋迪復古、直龍圖閣劉明復、皆師李成。復古比二公特細秀、作松枝而無向背、荆楚細甚秀。

同書

王誥学李成皴法、以金礫為之。似古今觀音宝陀山状、作小景、亦墨作平遠。皆李成法也。

(117) 湯屋『画鑑』當邱李成世業儒「中略」、宋復古、李公年、王誥、陳用志、皆宗師之「後略」。(画品叢書本)

李公年と「山水図」については、次の論考がある。小田島俊、小川裕充「李公年筆山水図」、『美術史学』一三三号、一九九一年。于中航「北宋山水画家李公年小考」、『文物』一九九二年七期。小川裕充「李公年 山水図」、『臥遊 中国山水画—その世界』中央公論美術出版、二〇〇八年、初出「東方」一二二号、一九九一年。

(118) 『統資治通鑑長編』巻四〇九、元祐三年四月甲申から、巻四六八、元祐六年二月壬申の条に見える。

(119) 馮山「求劉忱明復龍圖為画山水」(『安岳集』巻七)

晋唐諸公重小筆、高仙直与才名俱。然多華丹少泉石、清格往往人間無。至今百存無一二、存者真偽難分區。營丘李成称絕迹、峰巒秀拔非常模。穆之灑落亦其亞、玉堂屏上瀟湘図。董屈許范凡数輩、隱隱俗氣藏肌膚。乃知山水係絕品、筆墨造化非功夫。要之文章之緒余、世上真巧婦吾儒。益昌台府少文字、見性文室談昆虛。龍門雪景生坐隅、山潛水與争奔趨。倚空直幹鬬孤聳、緣險古道盤繁紆。擁衲禪僧对寂寞、携琴朝士来崎嶇。主人肆筆聊自娛、新言默与天機符。公家清白傳数世、經濟滿腹冰霜壺。一言不用輒掉臂、五年蜀使甘馳驅。時將素毫写胸臆、寧復意外分精粗。復古雖清尚許格復古有詩「許の誤りか」道靈格、疑其學許也、与可亦壯非燕徒文与可学燕穆之、然未至也。豈如公思去脱羈束、破碎高華傾江湖。窮冬從公熟窺看、愛重不覺声嗟吁。靈峰北苑助蕭爽、雪不到地風号枯。平生好画已

成僻、寧借不喜臨与摹。出門門下欠公筆、有類客海遺明珠。願公乘興一揮灑、束絹數幅光芬敷。異時解組還故廬、皎潔將伴林泉軀。(四庫全書本)

(120) 董源については、以前、伝称作品の「寒林重汀図」について、考察の機会をもった。拙稿「『館藏品研究』(伝) 董源「寒林重汀図」の觀察と基礎的

考察(上)(下)」「『古文化研究』三、四号、二〇〇四、二〇〇五年)。

(121) 『宣和画譜』卷一〇、山水叙論

「前略」自唐至本朝、以画山水得名者、類非画家者流、而多出於縉紳士大夫「中略」。至本朝李成一出、雖師法荆浩、而擅出藍之譽、数子之法、遂亦掃地無余。如范寬、郭熙、王詵之流、固已各自名家、而皆得其一體、不足以窺其奧也「後略」。(画史叢書本)

(122) 『宣和画譜』卷一一、李成条

李成、字咸熙。其先唐之宗室、五季艱難之際、流寓於四方、避地北海、遂為營邱人。父祖以儒學吏事聞於時、家世中衰、至成猶能以儒道自業。善属文、氣調不凡、而磊落有大志。因才命不偶、遂放意於詩酒之間。又寓興于画、精妙初非求售、唯以自娛於其間耳。故所画山林藪沢、平遠險易、縈帶曲折、飛流危棧、断橋絶澗、水石風雨晦明、煙雲雪霧之状、一皆吐其胸中、而写之筆下、如孟郊之鳴於詩、張顛之狂於草、無適而非此也、筆力因是大進。于時凡称山水者必以成爲古今第一、至不名而曰李营邱焉。然雖画家素喜譏評、號為善褒貶者無不斂衽以推之。嘗有頭人孫氏、知成善画得名、故貽書招之。成得書、且憤且歎曰、自古四民、不相雜處、吾本儒生、雖游心芸事、然適意而已、奈何使人羈致、入戚里賓館、研吮丹粉、而与画史冗人同列乎、此戴逵之所以碎琴也。却其使不応。孫忿之、陰以賄賂營邱之在仕相知者、冀其宛轉以術取之也、不踰時而果得数図以歸。未幾、成隨郡計赴春官較芸、而孫氏卑辭厚礼復招之、既不獲已、至孫館、成乃見前之所画、張於調舍中、成作色振衣而去。其後王公貴戚皆馳書致幣、懇請者不絶於道、而成漫不省也。晚年好遊江湖間、終於淮陽逆旅。子覺、以經術知名、踐歷館閣。孫宥、嘗為天章閣待制、尹京、故出金帛以購成之所画甚多、悉歸而藏之。自成歿後、名益著、其画益難得、故学成者、皆摹倣成所画峰巒泉石至於刻画図記名字等、庶幾乱真、可以欺世、然不到处、終為識者弁之、第名之不可掩、而使人慕之如是、信公議所同焉。或云又兼善画龍水、亦奇絶也、但所長在於山水之間、故不称云。今御府所藏一百五十有九「後略」。

(123) 『芸文類聚』卷四四、琴

晋中興書曰、戴逵字安道、少有文芸、善鼓琴。太宰武陵王晞、聞其能琴、使人召焉。逵对使者前、打破琴曰、戴安道不能為王侯伶人。(上海古籍出版社排印本)

『宣和画譜』の李成伝については、西上勝氏の「蘇黄題画跋と画人伝の成立」(『中国文史論叢』五号、二〇〇九年)が蘇軾、黄庭堅の題跋文学との關係に注目しており、戴逵の故事の典故についてもこれに示教を得た。四六、四九頁。

(124) 鄧椿「画繼」卷一〇、雜説、論近には、徽宗朝において宮中のいづれかの郭熙壁画が取り外され、内蔵庫の退材所にしまい込まれていたという著名な記述がある。

(125) 徽宗朝の画院画家で李郭画風を学んだと画史類に記されるものは、意外に少ない。和成忠(『画繼』卷六)、郭信(元・夏文彦「図繪宝鑑」卷三)、楊士賢(『図繪宝鑑』卷四)、張洵(『図繪宝鑑』卷四)、顧亮(『図繪宝鑑』卷四)が挙げられるが、このうち楊士賢以下の三人は元・莊肅「画繼補遺」では画院に入ったことは述べられず、疑問が残る。

(126) 註17前掲、小田島氏、小川氏「李公年筆山水図」、八一〜八二頁、小川氏「李公年 山水図」、二〇七頁。拙稿「千里江山図」解説(『世界美術大全集 東洋編五』小学館、一九九八年)、三六〇頁。

(127) 小川裕充「岷山晴雪図」(註17前掲「臥遊」、初出「東方」一一四号、一九九〇年)、一九九頁。

(128) 『画繼』卷九、雜説、論遠

李营邱、多才足学之士也。少有大志、屢举不第、竟無所成、故放意於画。其所作寒林、多在巖穴中、裁筍俱露、以興君子之在野也、自余窠植、尽生於平地、亦以興小人在位、其意微矣「後略」。(画史叢書本)

(129) 註24前掲、拙稿「唐代の樹石画について」、上編七一、八一〜八四頁。

(130) 註24前掲、拙稿「唐代の樹石画について」、下編三〇〜三三頁。註1前掲、拙稿「(伝) 李成「喬松平遠図」(澄懷堂美術館)について」、一二頁。

〔図版出典一覧〕

- 図1、図4、図6、図8、『世界美術大全集 東洋編五』(小学館、一九九八年)。  
図2、図3、『崇高なる山水—中国・朝鮮、李郭系山水画の系譜—』(大和文華館、二〇〇八年)。  
図5、小川裕充『臥遊 中国山水画—その世界—』(中央公論美術出版、二〇〇八年)。  
図7、『中華五千年文物集刊 宋画篇二』(中華五千年文物集刊編輯委員会、一九八五年)。